

## 移住による言語変容(1)

### —鳥取県香取地区—

中井幸比古・島田治・岸江信介・吉廣綾子

Language Change by Immigration No.1  
-A case study of Katori district in Tottori -

Yukihiko NAKAI, Osamu SHIMADA,  
Shinsuke KISHIE and Ayako YOSHIHIRO

#### Abstract

The study of language change by immigration in Japan has not been so far dealt with very much except a case of immigration in Hokkaido. We argue a case moved from Kagawa prefecture to Tottori prefecture as a group almost over fifty years ago. We interviewed immigrants who live at Katori district in Daisencho of Tottori about dialect, sound, accent, aspect as grammatical elements and annual events of Katori to know which dialect (Kagawa dialect or Tottori dialect) tends to be used by each informant. This paper describes how immigration contributes to language change, especially, we suggest that difference of language use tends to depend mainly on different generation of immigrants through the survey with regard to the choice of dialect.

## 1. はじめに

移住による言語変容の研究は、北海道を中心に相当量の研究の蓄積がある(小野2001等を参照)。しかし、各地の伝統方言研究に比べれば、不十分な点も多く、さらに事例研究を積み重ねる必要がある。今回は、その一つとして、香川県から鳥取県香取地区への集団移住による言語変容を扱う。本稿では、アクセント・若干の語彙・年中行事・アスペクト・音声表現に重点を絞り、報告を行う。

本稿の分担は、以下のものである。島田：調査の企画・統括・原稿校閲。中井：1～6節執筆、岸江：7節執筆、吉廣：8節執筆。文責はそれぞれの執筆者にある。

調査は、2004年7月から11月にかけて、4名共同で行った。香取地区の調査については香取開拓農協(田尾昭典組合長)の全面的な協力を得た。同農協のご協力がなければ、調査そのものが存在しなかったであろう。周辺地区の調査については、ホテル大山・各地区公民館のご協力も得た。関係各位の御厚意に、厚く御礼を申し上げる。

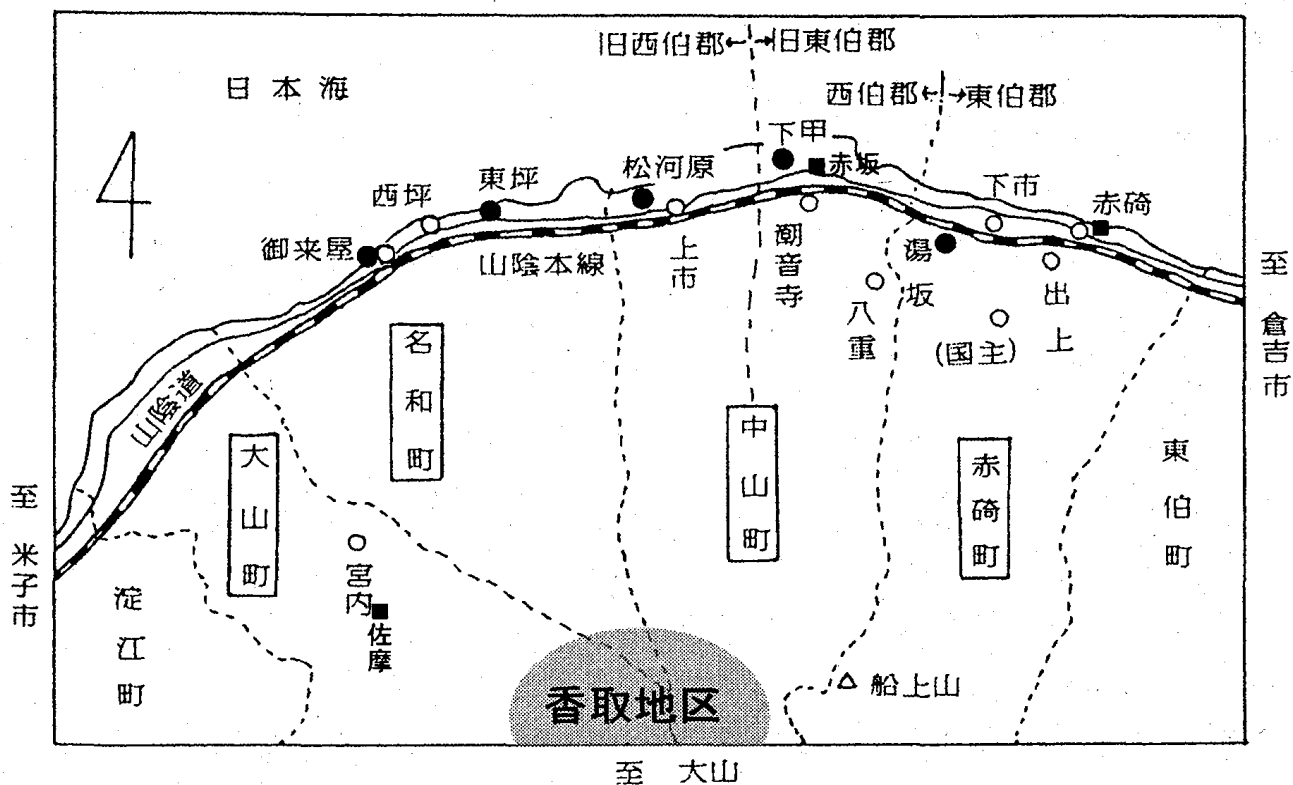
## 2. 調査地域の概要

香取地区は、鳥取県西部、<sup>かとり</sup>大山町・<sup>だいせんちょう</sup>名和町・<sup>なわちょう</sup>中山町の3町にまたがる、大山山麓の酪農を主産業とする開拓地である。(本稿の地名は、原則として、2～6節においては平成の大合併直前のものを使い、それ以外の節では現行のものを用いる)。

3町のうち大山町域に人家がもっとも多い。行政区画は3町にまたがっているものの、全体として一つの地域としてよく纏まっている。香取地区の位置は図1を参照。この地区は元来全くの未開の原野だったが、1946年に始まった開拓によってはじめて、人が住むようになった。

「香取」(「香川+鳥取」に由来)の名からもわかるように、この地区の居住者のほとんどは香川県出身者である。現在の住民の出身地の詳細は不明なので、過去の資料を見る。

まず1950年段階について検討する。資料は、香取開拓農協(1994)p.123が引用する、農林省中国四国農業試験場農業経営部(1950)「鳥取県香取開拓団の建設過程」『中国農経資料第一号』による。これは、開拓開始の1946年から数年が経過し、住民が一応安定した時期のものである。



●は広戸・大原1952の、○は上野1982の、■及び香取地区は今回の、それぞれの調査地点。一部重複地点あり

図1 調査地域(上野1982の図を基に加工)

当時の居住者は全71戸だが、そのうち純粹の入植者は64戸であり、その64戸の出身地を示す。[ ]内は本稿筆者の注記。香川県内はおよそ西から東に配列。

香川県		栗熊村[現綾歌町]	20	木田郡	4
三豊郡	5	岡田村[現綾歌町]	1	大川郡	1(以上香川県)
仲多度郡	16	滝宮村[現綾南町]	1	越智郡[香川県とあるが愛媛県の誤か?]	1
丸亀市	1	松山村[現坂出市]	1	三重県	2
綾歌郡		加茂村[現坂出市]	2	東京都	2
坂本村[現飯山町]	4	高松市	1	合計	64
富熊村[現綾歌町]	1	香川郡	1		

上記64戸のうち、およそ3分の2を占める46戸が、戦前、満州開拓に従事した人たちであったという。敗戦のために無一物で日本本土に引き揚げ、1946年

新天地を求めて、未開の原野の大山山麓へ入植した。そして、その元満州開拓者の中核をなすのが、戦前、香川県栗熊村くりくまむらの分村計画により、分村移民して満州樺林かばりんに開拓村を建設していた人たちである。栗熊村は香川県の中西部に位置する。上表で香川県出身者全体をみたとき、県東部出身者はごく少なく、西部～中部の出身者が占める割合が高い。

次に、遡って、入植直後の、1946年10月「草谷原開拓組合名簿」(香取開拓農協1994 p. 77)では94名(戸)で、その出身県の構成は以下のようなものである：

香川	73名	沖縄	1	大阪	1	京都	1
北海道	7	岡山	1	東京	1	不明	9

ここでも、やはり香川県出身者が大多数を占めるが、他県出身者の割合が上より少し多い。開拓当初は、テントの中での共同生活と共有財産制(当初3年間)、困難を極めた開墾・建設作業等々のために、開拓団から退団していった者も多かった。退団者数は1948-49年の間に22名、あるいは1947年に29戸(同書p. 141)にのぼったというが、退団者には香川県以外の出身者が多かったのだろう。

逆に、1948年に29戸、1949年には15戸の新入植者があり、一時的に100戸以上の農家があったことになる。これら新入植者のほうが、1946年の最初の入植者よりも定着率が高かったという。その原因は、開墾がすでにやや進んでいたこと、開拓に適した条件を備えた人が入植したこと、家族ごとの個別生活・私有財産制となっていたことなどだという。新入植者の出身地は、上記1950年の統計資料から推測する限り、ほとんど香川県中・西部の出身だったようである。言うまでもなく、開拓当初の共同生活・共有財産制のおかげで、達成できた事柄は数多くあったに違いない。

1950年頃以降は、現在に至るまで移入者はわずかだったらしい[同書pp. 162-169が引用する、1959「香取開拓団の概況」(「香取開拓団調査報告」『社会問題研究』10-2)などによる]。

現在の主産業である酪農は、1955(昭和30)年頃に本格的に開始され、1965年頃に至ってさらに急速に進展したものである。開拓当初は農業が試みられたが、土地・気候の関係でなかなかうまくいかず、大変な苦労があったという。酪農の進展は、1955-65年頃、酪農のための、公的な営農資金の借り入れが可能になったことが大きいという。反面、昭和30-40年頃は、戦後の高度成長期であり、家長による冬季出稼ぎがさかんで、やがて家族もろとも都市部に転居

してしまう家が増えていった。そして、1991(平成3)年には香取地区の人口は64戸(このうち農家は47戸)にまで減少している(64戸という数字は上記1950年の数字と一致している)。

周辺の、鳥取県の元々ある集落(「里(さと)」「里部(さとぶ)」などと言う)との交流については、約8km離れた大山町佐摩との行き来がもっとも多く、以前は買い物などもここで済ませることが多かった。大きな買い物は、大山町の西側の、淀江町や米子市に出かけることが多い。

学校は、香取地区内に大山小学校香取分校がある(大山小学校の本校は大山町佐摩にある)。名和町・中山町の集落との行き来は、大山町に比べれば、やや少なかったようである。なお、香取地区の大山町域にある家だけでなく、名和町・中山町域にある家の子供も、この分校に通う。中学校も、香取地区全域が、大山町にある大山中学校に通う。高等学校に進学する場合は、米子市内の高校に通うのがほとんどである。

周辺集落との付き合いは、開拓当初は非常に少なく、生活が軌道に乗った1955年頃から、ようやく本格化したという。婚姻も当初は地区内どうしが多かったが、徐々に範囲が広がっていったようである。現在は、香取地区から米子市内などへ自動車通勤をする人もあり、入植地としての特殊性を持ちながらも、鳥取県内の1集落として、徐々に周辺地域に解け込んで行っているのだろう。

一方、集落全体の香川県との交流としては、毎年11月11日に行われる入植記念祭で、今から40年くらい前からずっと、綾歌町栗熊から奉仕団体がやってきて、うどんをふるまってくれ、香取の人々と交歓する。香川県の中で特別に、栗熊との交流が行われているのは、栗熊出身者が入植者の中核を占めるからだろう。

ただ、現在では、政治経済面での香川県との結び付きは、それほど強くなさそうである。

### 3. 話者の一覧

話者は、以下の方々である。いずれも香川県出身者または、香川県出身者を親・祖父母に持つ方々に限定した。「番号生年性別 居住歴 父出身地 母出身地 \*面接者」の順に示す。話者の配列は生年順。

①1920男 1939まで香川県観音寺市栗井、1940-46満州(兵役のため)、1946以降香取 父観音寺市、母観音寺市 \*中井・吉廣

②1922女 1942頃まで香川県綾歌町栗熊、1942-48?満州樺林、1948以降香取

父栗熊 母栗熊。 \*島田・中井・吉廣

- ③1929男 1939頃まで綾歌町富熊、1939-44満州樺林、1944-48才香川県綾歌町富熊、19才-香取 父富熊 母栗熊 \*中井
- ④1930男 1930-1946?綾歌郡飯山町東坂元、1946以降香取 父香川県 母香川県 \*島田・岸江・吉廣
- ⑤1942男 1949頃まで香川県三豊郡詫間町、1949-53九州など、1953以降香取 父詫間 母詫間 \*島田・中井・吉廣
- ⑥1950男 1950-現在香取、但し外住鳥取県関金<sup>せきがね</sup>1年。 父栗熊 母栗熊 (=話者②) \*島田・中井・吉廣
- ⑦1953男 1953-現在香取。外住神戸3年 父綾歌郡栗熊 母同所 \*岸江
- ⑧1965男 1965-現在香取。外住不明、5年以下 (現在香取から米子?へ通勤) 父香川県 母香川県 \*岸江
- ⑨1972男 1972-現在香取、但し、外住3年 父香取 母香取 \*中井
- ⑩1986男 1986-現在香取 (高校入学後現在米子で?寮生活) 父香取 (話者③は祖父) 母広島 \*島田・岸江・吉廣

参考のため、香取地区周辺の鳥取県出身者を調査した。話者は以下の3名。

- (1)1930女 1930-結婚まで鳥取県中山町<sup>あかさか</sup>赤坂、結婚後鳥取県大山町佐摩 父中山町内 母赤坂 \*中井
- (2)1937男 1937-現在まで鳥取県大山町佐摩 父不明 母不明 \*島田・吉廣
- (3)1955女 1957-結婚まで鳥取県赤碕町赤碕、結婚後香取 父不明 母不明 \*島田・中井・吉廣

## 4. アクセント

### 4.1 課題の設定

アクセント (以下4節ではアと略す) については、以下のような課題を設定して調査した。

(a)香川県綾歌郡栗熊出身者を核に、県中部～西部が住民の多くを占める。その出身地のアは大枠としては讃岐式であるが、細かな地域差があることが知られている。集団入植によって、それらの細かな地域差はどの程度維持されるのか?核となる栗熊アへの収斂は見られるのか?

(b)栗熊アへの収斂だけでなく、香取独自のア変化によって、新たな体系が生まれているか?

(c) 周辺の鳥取県の集落 (図 1) には、外輪東京式と中輪東京式の両方が分布することが知られている。これらのアはどのような影響を与えているのか？

(d) アの共通語化はどの程度進行しているか？但し共通語アも中輪東京式であるため、上記(c)の一部と区別が難しい。

(e) アに関するコードスイッチングは行われているか。

以上 5 点に関する結論を先に述べれば、以下のようである。

(a) 香川県栗熊アへの収斂は、調査した範囲では見られず、讃岐式アの体系・音調型を持っている話者は、その出自地域のアをよく保存している。

(b) 香取独自のア変化によって新たな体系が生まれる、という現象はほとんど観察できない。

(c) (d) 若い話者(1960年前後生以降に多い)は東京式に変化してしまっているが、共通語化[周辺地区の中輪東京式の影響は小さいと思われる]と、周辺地域の外輪東京式の影響の両方が関係していると思われる。

(e) アに関するコードスイッチングについては別の機会に譲るが、4.3節・4.5節で簡単に触れる。

## 4.2 香川県出自地域と、鳥取県の周辺地域のアクセント

上記課題(a)に関連して、香川県の出自地域と、鳥取県の周辺地域のアをまとめておく必要がある。

香川県内の、話者①～⑩の出自は、そのアから 3 つに区分される。玉井(1965)によって、そのアをまとめる。観音寺市：話者①＝玉井調査地点 4・5 の東南、詫間町：話者⑤＝玉井調査地点 16 近辺、綾歌郡綾歌町・飯山町：話者②③④⑥⑦⑨⑩＝玉井調査地点 56～58 [当時は久万玉・飯山] 近辺。(話者⑧は香川県内の出身地不明)。

一方、鳥取県の周辺地域のアは、広戸・大原(1952)と上野(1982)に詳しいが、香取地区の東北の東伯郡には中輪東京式が、西北の西伯郡には外輪東京式が分布する。両者の境界は必ずしも明瞭ではなく、ある程度「移行性分布」の様相を示す。2拍2類のアを基準にすると、西から、大山町・名和町はほぼ外輪式

(0)、中山町は移行地帯。赤碕町は中輪式的(2)だが一部外輪式的単語も散見する。以上の地理的分布から考えて、共通語化がなければ、香取地区に強い影響を与えるのは、中輪式ではなく、外輪式アだと思われる。

下に、玉井報告の上記地点のアと、上野報告による鳥取県周辺地区のアをあげる。下線を付けた部分が、讃岐式・東京式の内部で地域差がある項目。

			玉井(1965)による出自地域ア			上野(1982)による 周辺地域ア	
			観音寺市	詫間町	綾歌町 飯山町	鳥取県 西伯郡	鳥取県 東伯郡
1拍名詞	1類	血が	hl, H1, <u>(hh) (H0)</u>	hh, H0, <u>(hl) (H1)</u>	hl, H1, <u>(hh) (H0)</u>	0	0
"	2類	名が	hl H1	hl H1	hl H1	0	0
"	3類	絵が	ll L0	ll L0	ll L0	1	1
2拍名詞	1類	鳥が	hhh H0	hhh H0	hhh H0	0	0
"	2類	音が	hll H1	hll H1	hll H1	0	2
"	3類	山が	hhh H0	hhh H0	hhh H0	2	2
"	4類	空が	lll L0	lll L0	lll L0	1	1
"	5類	雨が	lhl L2	lhl L2	lhl L2	1	1
12拍動詞	1類	着る	<u>hh H0</u>	<u>hh H0</u>	<u>hl H1</u>	0	0
"	2類	見る	<u>ll L0</u>	<u>ll L0</u>	<u>hl H1</u>	1	1
2拍動詞	1類	売る	<u>hh H0</u>	<u>hh H0</u>	<u>hl H1</u>	0	0
"	2類	書く	ll L0	ll L0	ll L0	1	1
23拍動詞	1類	捨てる	<u>hhh H0</u>	<u>lhl L2</u>	<u>hll H1</u>	0	0
"	2類	起きる	<u>lll L0</u>	<u>hhh H0</u>	<u>lhl L2</u>	2	2
3拍動詞	1類	洗う	<u>hhh H0</u>	<u>lhl L2</u>	<u>hll H1</u>	0	0
"	2類	余る	<u>hhh H0</u>	<u>hhh H0</u>	<u>lhl L2</u>	2	2
"	3類	歩く	<u>lll L0</u>	<u>lhl L2</u>	<u>lhl L2</u>	2	2
3拍形容詞	1類	赤い	hll H1	hll H1	hll H1	0	0
"	2類	白い	<u>hll H1</u>	<u>hll H1</u>	<u>lhl L2</u>	2	2

ここで、讃岐式については、hは高(中も含む)、lは低の具体的音調を表す。ll, lllは現実には中程度になったり、徐々に上昇したり、末尾がhにも。また、音韻論的型も併記するが、Hは高起平進式・高起下降式、Lは低起上昇式・低接非下降式等をそれぞれ合わせたもの。0, 1, 2...は下げ核の有無と位置。この地域の式音調の詳細な地域差は今後にまつところが大きいが、佐藤(1986)などを参照されたい。玉井論文の当該地域の地図を若干加工して再掲する(図2)。□で囲んだ市町村名(玉井論文執筆当時)が今回の話者の出自である。





1世(①～⑤)・2世(⑥～⑧)・3世(⑨⑩)という観点からすると、2世の一部から変化が兆している、ということになる。全国的に、各地の方言が共通語化が進んだ時期とも一致する。

調査票読み上げ以外の場面でのアについては、詳しく調査できていないが、調査者との会話におけるアは、およそ以下のようにまとめて問題がないだろう。

①～⑤(1920～1942生)、⑦(1953生)はほぼ讃岐式。但し、2拍L0・L2が散発的にH1となる(例えば「イマ 今」⑤H1)。

⑥は讃岐式的だが、東京式的アがかなり混ざる：「ナツタラ 成ったら1?H1?, コトバ 言葉3?H3?」など。

⑧はほぼ讃岐式で、①～⑤に近い。

⑨⑩はほぼ東京式。

ここで、⑧以外は、調査票読み上げと自由会話とで、それほど大きな違いはない。但し、讃岐式またはそれに近い①～⑥⑦は、自由会話のほうに東京式的アが目立つ。

一方、⑧だけが、調査票読み上げと自由会話とで著しくアが異なり、かつ、自由会話が讃岐式で、調査票読み上げがほぼ東京式という、逆の方向の切り替えを行っている。3世の一部でもまだ、ア体系の変化は完全には終了していない。

周辺地域と香取とのアの違いを意識している話者も多いようである。例えば、話者⑥は、自分の世代は讃岐的だが、自分の子供はすっかりアクセントが違う、という意識を持っている。⑧などは、調査票読み上げでもアの使い分け意識を探れる可能性が高い。反面、話者⑤に個々の単語のアについて、周辺地域のそれを尋ねてみたが、反応はなかった。

なお、調査者は、調査の場面では、中央式(但し島田のみ讃岐式)に共通語アがいろいろの程度に混ざったア(共通語ア混入の程度は、おそらく島田がもっとも少ない)で話した。

ともあれ、特に話者⑥⑧については、より多くの場면을詳細に調べ、アの切り替えの実態を明かにする必要がある。しかし、本稿では調査票読み上げに限って報告を行う。

#### 4.4 讃岐式アクセント—話者①1920生～⑤、⑦1953生—

##### 4.4.1 音調型・ア体系

全員、いわゆる讃岐式の「丸亀型・観音寺型」と呼ばれているアである。すなわち、二つの式の対立と下げ核(0, 1, 2, ...)が弁別的な体系であるが、近畿中央部に分布する中央式(「京阪式」)の「高起平進式」「低起上昇式」と比較して、以下の特徴を持つ: 文節初頭の高さの差が小さい、「高起平進式」に対応する式が、必ず、ゆるやかに或いは特定位置で、少し下降する(「高起下降式」)。「低起上昇式」の上昇の度合いが小さくて上昇位置も不明確である。本稿では前者にH、後者にLの記号を与える。上の諸特徴には個人差・地域差もある程度存在するようだが、詳細は今後の課題である。音調型の一覧表は略す。たとえば佐藤(1987)を参照。

なお、全員2拍L2型の語末の拍内下降は、付属語を付けない限り、全員明瞭に存在し、L0とは区別できる。付属語なしで続けた場合(「雨好きか?」など)でも拍内下降あり。

連語の音調には、個人差がある。まず、句中のL0型はH0と区別がつきにくくなることがある。

特に、前にH0型の文節が来て一続きに発音した場合にそうである。今、「2拍H0型+が+ある」の音調を下に示す。ここで、#を付けた発話は、#の後に「ある」はあまり低くつかず、ガの高さとそれほど違わないものである。この音調は三豊郡出自の話者(①⑤)にはないが、地域差と言えるかどうかはわからない。一方、+を付けた発話は、+の後のアルはガより明瞭に低い。

なお、H0には、ゆるやかな、あるいは小さな下降があるから、末尾の高さが中程度であり、L0が後続する場合、そのまま続くことが不自然ではない(音調の方向で区別)、という可能性もあろうか。

但し、中井(2002)で述べたように、丸亀市飯野町出身玉井節子氏の内省では、上記環境でL0の音調はH0と同じになることもあるというから、少なくともそういった個人も存在する。

また、同じ句中でも、上記のような音調は、「この(H0)+L0型」の場合にはあまり現れない。この場合は、ほぼ必ずL0型は低接する。そうなると、句中における式の対立の中和のきざしなのか、動詞アのH0とL0の併用として処理できるものなのか、よくわからないのである。

読み	漢字	①観音寺 1920生	⑤詫間 1942生	②綾歌 1922生	③綾歌 1929生	④飯山 1930生	⑦綾歌 1953生
ニワガ+アル	庭がある	H0+L0	H0+L0	H0+L0, H0#H0	H0#H0?	H0+L0	H0#H0
ハナガ+アル	鼻がある	H0+L0	H0+L0	H0+L0, H0#H0	H0#H0?	H0+L0	H0#H0

ミズガ+アル	水がある	H0+L0	H0+L0	H0+L0, H0#H0	H0+L0	H0+L0	H0#H0
クチガ+アル	口がある	H0+L0	H0+L0	H0+L0	H0+L0	H0+L0	H0#H0
アシガ+アル	足がある	H0+L0	H0+L0	H0+L0	H0+L0	H0+L0	H0#H0
スミガ+アル	炭がある	H0+L0	H0+L0	H0+L0	H0+L0	H0+L0	H0#H0
ハナガ+アル	花がある	H0+L0	H0+L0	H0+L0	H0+L0, H0#H0?	H0+L0	H0#H0
ヤマガ+アル	山がある	H0+L0	H0+L0	H0+L0	H0+L0, H0#H0?	H0+L0	H0#H0

「2拍L0型+が+ある」の音調を以下に示す。ここで、\$を付けた発話は、「2拍L0型+が」のあとにアルが低接せず、ガと同じ高さでそのままアルが続くものである。一方、+を付けた物ものは、ガが高く、アルがそれに低接する。上の、「2拍H0型+が+ある」のアの地域差とは一致しないが、\$はやはり綾歌郡など、調査地域の中では東に多いのかもしれない。

⑦はL0\$L0とL0+H0の聞き分けがやや難しいが、やはり両者の違いは保たれているようである（後述4.7の音響分析参照）。

一般に、連語の音調は、助詞の強調・切れ目の置き方など、種々の変異の可能性があって、調査が難しい。

読み	漢字	①観音寺 1920生	⑤詫間 1942生	②綾歌 1922生	③綾歌 1929生	④飯山 1930生	⑦綾歌 1953生
オビガ+アル	帯がある	L0+L0	L0+L0	L0\$L0	L0\$L0	L0+L0	L0\$L0
ハシガ+アル	箸がある	L0+L0	L0\$L0	L0+L0	L0\$L0	L0+L0	L0\$L0
ハリガ+アル	針がある	L0+L0	L0\$L0	L0+L0	L0\$L0	L0+L0	L0\$L0
カサガ+アル	傘がある	L0+L0	L0+L0	L0+L0, L0\$L0	L0\$L0	L0+L0	L0\$L0
アメガ+アル	飴がある	L0+L0	L0\$L0	L0+L0	L0+L0	L0+L0	L0\$L0
アメガ+アル	飴がある	L0+L0	L0\$L0	L0\$L0	L0\$L0	L0\$L0	L0\$L0

#### 4.4.2 所属語彙

所属語彙の面では、出自の地域差・世代差が問題になる。それぞれについて述べる。

(1) 全員のAが一致するか、地域差や世代差がない項目

地域差・世代差について述べる前に、全員のAが一致する項目、あるいは多少の個人差があるが、地域差・世代差との関係が不明の調査項目をすべてあげておく。

なお、調査は以下の環境で行った。2拍名詞全項目：a 単独言い切り；b こ

のH0+〜; c〜が[順接]+好きH0; d〜が[順接]+あるL0の4環境、但し、dは、アルのかわりに、クル(来る)などに替えた語が数語あるが、そのアがL0ではない人があり、その場合はこの環境を欠く。1・3拍名詞全項目:上記abcのみ。動詞・形容詞:基本形言い切り・基本形+トキまたはモノ付き。付属語:下記挙例のように2拍体言につけ、言い切りで調査。

2拍体言 全員H0の項目:クチ 口、ソレ それ(指示代名詞)、ニワ 庭、ハナ 鼻[コノ〜欠]、ミズ 水(以上1類)、アシ 足、イヌ 犬、スミ 炭、ハナ 花、ヤマ 山(以上3類)、コノ この(連体)、スキ 好き(以上その他)。全員H1の項目:イシ 石、ウタ 歌、オト 音、カミ 紙、ハシ 橋、ハタ 旗、ヒル 昼、フユ 冬、ムネ 胸、ムラ 村(以上2類)、キン 金(以上その他)。全員L0の項目:アメ 飴(以上1類)、オビ 帯、カサ 傘、ハシ 箸、ハリ 針(以上4類)。全員L2F(付属語を付けなければ拍内下降あり)の項目:ウミ 海(以上4類)、アキ 秋、アメ 雨、ナベ 鍋、マド 窓(以上5類)。その他:話者④のみL0、①②③⑤⑦L2F=スミ 隅(以上4類)。話者①②③⑤H0、④⑦H1=トキ 時(動詞基本形後続で調査)、モノ 物(形容詞基本形後続で調査。以上3類)。

3拍体言 全員H0:クルマ 車、ハナジ 鼻血(以上1類)、カガミ 鏡(以上4類)、アブラ 油(以上5類)。H0優勢だが若干の例外あるもの:タタミ 畳(話者⑤のみL0?) (以上1類)、アタマ 頭(例外:①L0)(以上4類)。全員H1:ヒガシ 東、ムスメ 娘(話者③はH0も?) (以上2類)、アサヒ 朝日、モミジ 紅葉(以上5類)、エーガ 映画、エクボ えくぼ、キンギョ 金魚(以上その他)。H1が優勢だが若干の例外があるもの:コムギ 小麦(例外:①L2、⑦L0?L2?H0?) (以上3類)、アミド 網戸(例外:⑦H0, L2)、ニワシ 庭師(例外:⑤⑦L2)(以上その他)。全員L0:カエル 蛙、スズメ 雀、ネズミ 鼠(以上6類)。全員L2:アズキ 小豆(以上2類)、クジラ 鯨、クスリ 薬、ツバキ 椿、ハタケ 畑(以上7類)

1拍体言(話者③④⑦はやや短くなることもあり、その場合、付属語を付けないとH1かH0か不明確)。全員H1:カ 蚊、チ 血(以上1類)、ハ 葉(以上2類)。全員L0:キ 木、テ 手(以上3類)。

動詞・形容詞 基本形言い切りと、「トキ(時)[動詞の全部と形容詞の一部]、またはモノ(物)[形容詞の多く]」を付けて調査。全員L0:カク 書く、ノム 飲む; エー 良い。付属語ガ・ノ・カラ:全員順接(但しL2+カラは話者により[④など]、時に拍内下降が聞かれる)。以下、付属語つき言い切りで文節全体を1語とみた時のア。全員H0:クチガ 口が、ニワガ 庭が、イヌガ 犬が、ヤマガ 山が; クチノ 口の、ニワノ 庭の、ミズノ 水の、アシノ 足の、イヌノ 犬の、ヤマノ 山の; クチカラ 口から、ニワカラ 庭から、ハナカラ 花から、ヤマカラ 山から。全員H1:イシガ 石が、ムラガ 村が、キ

ンガ 金が；ウタノ 歌の、カミノ 紙の、ハシノ 橋の、ムラノ 村の；ムラカラ 村から、イシカラ 石から、キンカラ 金から。全員L0:オビガ 帯が、ハリガ 針が；オビノ 帯の、カサノ 傘の；オビカラ 帯から、カサカラ 傘から。全員L2:アキガ 秋が、マドガ 窓が；アメノ 雨の、ナベノ 鍋の；アキカラ 秋から、マドカラ 窓から。

## (2) 所属語彙に関する、出自地域によるアの地域差

上記4.2で示したように、香川県中西部で地域差で顕著なのは、用言のアの地域差である。これについて述べる。さらに、玉井報告によれば、1拍体言も多少の地域差があるが、今回は調査語数が少ないため詳細不明であり、報告を省く。今回の調査結果をまとめて示す（「終止形；連体形」の順）：

読み	漢字	①観音寺 1920生	⑤詫間 1942生	②綾歌 1922生	③綾歌 1929生	④飯山 1930生	⑦綾歌 1953生
キル, ネル	着る, 寝る	H0;H0	H1;H0	H1;H1	H1;H1	H1;H1	H1;H1
デル, ミル	出る, 見る	L0;L0	L0;L0	H1;H1	H1;H1	H1;H1	H1;H1
ナク, フム	鳴く, 踏む	H0;H0	H1;H0	H1;H1	H1;H1	H1;H1	H1;H1
キル,	消える,	H0;H0	H1;H0	H1;H1.	H1;H1	H1;H1	H1;H1
マクル, ハレル	負ける, 腫れる			(H0, L2も?)			
タテル,	建てる,	L0;L0	L2;L2	L2;L2	L2;L2	L2;L2	L2;L2
タベル, ハレル	食べる, 晴れる						
アタル, ワラウ	当たる, 笑う	H0;H0	H1;H0	H1;H1.	H1;H1.	H1;H1	H1;H1
				(L2も?)	(L2も?)		
ウゴク, ハラウ	動く, 払う	H0;H0	H1;H0	L2;L2	L2;L2	L2;L2	L2;L2
アルク	歩く	L0;L0	L2;L2	L2;L2	L2;L2	H1?L2?;L2	L2;L2
カサナル	重なる	H0;H0	H1;H0	H3?;H3?	L2?H1?;L2?H1?	H1?;H1?	H3;H3
ヨロコブ	喜ぶ	H0;H0	H1;H0	H3?;H3?	H3?;H3?	H3?;H3?	H3;H3
アカイ	赤い	H1;H1	H1;H1, H0	L2, H1;L2, H1	H1;H1	H1;H1	H1;H1
アマイ	甘い	H1;H1	H1;H1, H0	L2, H1;L2, H1	H1;H1	H1;H1	H1;H1
サムイ	寒い	H1;H1	H1;H1, H0	L2;L2	L2;L2	L2;L2	L2;L2
シロイ	白い	H1;H1	H1;H1, H0	L2;L2	L2;L2	L2;L2	L2;L2
モノ	物	H0	H0	H0	H0	H1	H1

トキ 時 H0 H0 H0 H0 H1 H1

話者①（観音寺）は玉井論文に一致。

話者⑤（詫間）は玉井論文とは、1類動詞と上記全部の形容詞のアが異なる。玉井論文では1類動詞はH0、形容詞はH1（言い切りのみの調査？）だが、話者⑤は、1類動詞「言い切りH1、トキ/モノ付き連体形H0」、形容詞「言い切りH1、トキ/モノ付き連体形H1, H0」であった。詳しい臨地調査が必要だが、少なくとも1類動詞については、佐藤栄作氏が話者⑤のタイプを、詫間町の南側の地域で報告しているの、話者⑤の出身地は玉井報告の地点よりも南なのだろう。

話者②③④⑦（綾歌町・飯山町）は、ばらつきが多少あるが、玉井報告におよそ一致する。

### (3) 所属語彙に関する世代差

もちろん、うんと若い世代では東京式アとなるが、上記の話者の範囲内では、それほど顕著な世代差はみられない。わずかに、付属語マデのアについて、世代差が見られ、若い人のほうがアが単純化している。すなわち、概して高齢の人（①⑤②）では、高起式に付いた場合と低起式に付いた場合とでアが異なる：高起式無核には低く付き、低起式無核に付くとマデのマに核がある。一方、比較的若い人（③④⑦）は、高起式無核・低起式無核ともにマに核があり、統一されている。

読み	漢字	①観音寺	⑤詫間	②綾歌	③綾歌	④飯山	⑦綾歌
		1920	1942	1922	1929	1930	1953
H0+マデ	(口まで, 庭まで, 花まで, 山まで)	H2	H2	H2	H3	H2?	H3
L0+マデ	(帯まで, 傘まで)	L3	L3	L3	L3	L3	L3
L2+マデ	(秋まで, 窓まで)	L3?	L2	L3?	L2	L2	L2
H1+マデ	(村まで, 石まで, 金 <sup>きん</sup> まで)	H1	H1	H1	H1	H1	H1

### 4.5 ほぼ讃岐式だが体系変化が兆しているもの=⑥1950生

話者⑥は、ほぼ讃岐式だが、以下の(1)~(3)の諸点で体系の変化が兆している。話者②は話者⑥のお母様にあたるので、そのアと比較する。

(1)式の対立が不明瞭になっている。とくに2拍語のH0とL0は、単語単独で聞き分け困難。しかし、両者の対立が失われているほどではないよう。

(2)2拍L2型の拍内下降がほぼ消滅している。そのため、2拍では、付属語なしでは、(H)1以外の3つの型が類似した音調となる。しかし、区別は保たれているようである。

(3)核の位置の移動は、以下の3種の語に現れた：

- ・2拍2類名詞の調査語彙10語（讃岐式[出自地区。本節では以下同じ]でH1）のうち、以下4語に(L)2, (H)0の音調が現れた：「ムネ 胸、ムラ 村、ハシ 橋、フユ 昼」。
- ・3拍名詞5類の3語のうち、以下の3語に(L)2が現れた：「アブラ 油、アサヒ 朝日、モミジ 紅葉」（讃岐式で「油」H0、「朝日・紅葉」H1）。
- ・2・3拍動詞、3拍動詞の各1類に(L)2, (H)0が現れた：「キエル 消える、マケル 負ける、アタル 当たる、ワラウ 笑う」（讃岐式出自地域でH1。なおこの話者は、1・2拍、）。

これら3種に共通するのは、讃岐式でH1型で現れる語を、(L)2または(H)0で発音するという点である。これについてはそれほど意識的ではないようである。一方、讃岐式でL0, L2型の語（例えば2拍名詞4・5類）は、周辺地区の1型と違いがあるという意識が非常に強く、「自分のアは讃岐式だから(H)1は使わない」と言われ、実際調査票読み上げでは、ほぼL0, L2で統一。また、讃岐式でH0型の語は、ほぼそのままH0が保たれている（上例で「油」は例外）。

このように、体系が不安定な話者の音調の記録は難しいので、上記のような概要を述べるにとどめた。

#### 4.6 東京式アクセント

＝話者⑧1965生～⑩1986生、周辺地域話者(1)～(3)＝

##### 4.6.1 音調型・ア体系

先に4.2で述べたように、先行調査報告によれば、周辺地域の東京式アは1拍卓立型（核のある拍・無核では末尾拍）が優勢だが、今回の話者は、必ずしもそうではない。話者ごとの句音調をあげておく：

- |              |                         |
|--------------|-------------------------|
| ⑧1965        | 2拍目から高、または初頭から高         |
| ⑨1972        | 2拍目から高が多いが、時に1拍卓立的な音調も。 |
| ⑩1986        | ほぼ2拍目から高のよう。            |
| (2)1937 大山町? | 2拍目から高、または漸層的に上昇        |



(1)1930 中山町赤坂 かなり明瞭な1拍卓立型

(3)1955 赤碕町赤碕 2拍目から高が多いが、時に1拍卓立的

あるいは、周辺地域のアは、1拍卓立型から、共通語化のためになどが原因で、2拍目から高に変化しつつあるのかもしれない。

一方、香取地区の東京式話者は1拍卓立が少ないわけだが、これは、共通語の直接的影響なのか、周辺地区のアを介しての間接的な共通語化なのかは不明である。

個々の発話の上昇位置は定めがたいことも多いので、以下においては、核の位置のみを示す。なお、無核型と語末核型は、付属語なし言い切りでは区別しにくいので、そのような発話は、02 (2拍語の場合。例えば「庭。山。」を各々1hと発話した場合、0か2かわからないのでこのように示す)、03 (3拍語)などと示す。音調型については4.7節も参照。

なお、話者(1)によると、「花(2)」と「鼻(0)」の最小対では、前者のほうが上昇の度合いが大きく、かつナが一層強いという意識があり、実際そのとおり発話される。しかし、最小対以外では、付属語なし言い切りで両者の区別を聞き分けることは、やや困難なので、両者をまとめて02と表記する。

語末核型は、付属語なしで続けた場合(「犬好きか?...」)も、原則として語末に下降があり、無核型と区別できる。但し、話者⑧のみ下降なしか?

#### 4.6.2 所属語彙

(1)全員のAが一致するか、地域差や世代差がない項目

全員のAが一致する項目、あるいは多少の個人差があるが、地域差・世代差と関係がなさそうな調査項目をすべてあげる。

なお、調査は以下の環境で行った。体言全項目：a 単独言い切り；b この0+～；c ～が[順接]+好き02の3環境 (cf. 讃岐式話者。動詞・形容詞：基本形言い切り・基本形+トキまたはモノ付き。付属語：下記挙例のように2拍体言につけ、言い切りで調査。

2拍体言 全員0：アメ 飴[話者(2)読み間違いで2も]、クチ 口、ニワ 庭、ハナ 鼻、ミズ 水。全員1：オビ 帯、カサ 傘、スミ 隅[話者(2)読み間違いで02も]、ハシ 箸[⑧⑩読み間違いで2も?]、ハリ 針(以上4類)、アキ 秋、アメ 雨、ウミ 海、ナベ 鍋、マド 窓(以上5類)、キン 金。全員2：アシ 足、イヌ 犬、スミ 炭、ハナ 花、ヤマ 山(以上3類)

3拍体言 全員0：クルマ 車、タタミ 畳、ハナジ 鼻血(以上1類)、アブラ 油(以上5類)、カエル 蛙(以上6類)、ハタケ 畑(以上7類)。全員1：キンギョ 金魚(以上そ

の他)。全員2：ニワシ 庭師(以上その他)

1 拍体言 (1 拍語は讃岐式話者と異なり、すべての環境で短い) 全員0：カ 蚊、チ 血、ハ 葉。全員1：キ 木、テ 手

動詞 (話者(3)は3拍5段動詞以上のトキ付調査を欠くが、一応語末核ではなく無核型で処理) 全員0：キル 着る、ネル 寝る；フム 踏む、ナク 鳴く；キエル 消える、ハレル 腫れる、マケル 負ける；アタル 当たる、ワラウ 笑う；カサナル 重なる。全員1：デル 出る、ミル 見る；カク 書く、ノム 飲む。全員2：タテル 建てる、タベル 食べる、ハレル 晴れる；ウゴク 動く、ハラウ 払う、アルク 歩く。全員3：ヨロコブ 喜ぶ。

形容詞 (話者(2)は調査欠) 全員1：エー 良い。全員2：サムイ 寒い、シロイ 白い。なお、連体形調査のための、トキ(時)は、話者⑧⑩が1、話者⑨(1)(2)(3)が02；モノ(物)は全員02。

付属語ガ・カラ (全員順接)、語末核型以外についてノ (語末核型についての場合のノは個人差あり後述)。以下、付属語つき言い切りで文節全体を1語とみた時のア。全員0：クチガ 口が、ニワガ 庭が、クチノ 口の、ニワノ 庭の、ミズノ 水の；クチカラ 口から、ニワカラ 庭から。全員1：キング 金が、オビガ 帯が、ハリガ 針が、アキガ 秋が、マドガ 窓が；オビノ 帯の、カサノ 傘の、アメノ 雨の、ナベノ 鍋の；キンカラ 金から、オビカラ 帯から、カサカラ 傘から、アキカラ 秋から、マドカラ 窓から。

## (2) 地域差・世代差がある項目

地域差・世代差が見られる項目を以下に掲げる。「単独；この～；～が好き」の順。単語の配列は調査票の順(「単独」で一通り調査し、その後で「この～」で一通り調査、その後で「～が好き」で調査)。

	⑧1965	⑨1972	⑩1986	(1)1930	(2)1937	(3)1955
体言	香取	香取	香取	中山/赤坂	大山/佐摩	赤碕/赤碕
2拍2類						
ウタ 歌	1, 02;02;2	02;02;2	02;02;2	02;02;2	02;02;2	02;02;2
オト 音	1, 02;02;2	02;02;2	02;02;2	02;02;0, 2	02;02;0	02;02;2
ハタ 旗	1, 02;02;2	02;02;0, 2	02;02;2	02;02;0, 2	02;02;0	02;02;2
ムネ 胸	1, 02;02;2	02;02;2	02;02;2	02;02;2	02;02;0	02;02;2
ムラ 村	02;02;2	02;02;2	02;02;2	02;02;2	02;02;0	02;02;2
イシ 石	1, 02;02;2	02;02;0, 2	02;02;2	02;02;0	02;02;0	02;02;2
カミ 紙	1, 02;02;2	02;02;0, 2	02;02;2	02;02;0	02;02;0	02;02;0

	ハシ	橋	02?:02;0	02;02;0, 2	1?, 02;02;2	02;02;0	1?:02;0	02;02;2
	ヒル	昼	1, 02;02;2	02;02;2	02;02;2	02;02;2	02;02;0	02;02;2
	フユ	冬	02;02;2	02;02;2	02;02;2	02;02;2	02;02;0	02;02;2
3拍2類	アズキ	小豆	03;03;0	2;2;2	03;03;2	03;03;0	03;03;0	03;03;3
	ヒガシ	東	03;03;0	03;03;0	03;03;0	03;03;0	03;03;0	03;03;3
	ムスメ	娘	03;03;3	03;03;0	03;03;3	03;03;3	03;03;0	03;03;3
3拍3類	コムギ	小麦	03;03;0	03;2;0	03;2;0	03;03;0	03;03;0	2;2;2
3拍4類	アタマ	頭	03;03;3	03;03;0, 3	03;03;3	03;03;3	03;03;3	03;03;3
	カガミ	鏡	03;03;3	03;03;0, 3	03;03;3	03;03;3	03;03;3	03;03;3
3拍5類	アサヒ	朝日	1;1;1	1;1;1	1;1;1	2;2;2	2;2;1	1;1;1
など	モミジ	紅葉	1;1;1	1;1;1	1;1;1	2;2;2	1;2?:1	1;1;1
	エクボ	笑窪	1;1;1	1;1;1	1;1;1	1;1;1	03;03;0	1;1;1
3拍6類	スズメ	雀	03;03;0	03;03;0	03;03;0	1;1;1	1;1;1	1;1;1
	ネズミ	鼠	03;03;0	03;03;0	03;03;0	03;03;0	1;1;1	03;03;0
3拍7類	クジラ	鯨	03;03;0	03;03;0	03;03;0	1;1;1	1;1;1	03;1;1
	クスリ	薬	03;03;0	03;2;0	03;03;0	03;03;0	03;03;0	03;03;0
	ツバキ	椿	1;1;1	1;1;1	1;1;1	2;1, 2;1, 2	1?:1;2	2;2;2
その他	アミド	網戸	2;1;2	2;2;2	2;2;2	03;03;3	03;03;3	2;2;2
	エーガ	映画	03;03;0	1, 03;03;0	03;03;0	03;03;0	03;03;0	03;03;0
1拍1類	チ	血	01;01;0	01;01;0	01;01;1	01;01;0	01;01;0	01;01;0

付属語ノ

	ウタノホ	歌の本	0+1	2+1, 0+1	2+1	2+1	2+1	2+1
	ムラノカ	村の中	0+1	0+1	0+1	2+1	0+1	2+1
	カミノイ	紙の色	0+02	2+02, 0+02	0+02	0+02	0+02	0+02
	ハシノエ	橋の上	0+02	0+02	0+02	0+02	1+02?	2+02
	アシノエ	足の上	2+02	0+02	0+02	2+02	2+02	2+02
	イヌノエ	犬の声	0+1	0+1	0+1	2+1	2+1	2+1
	ヤマノカ	山の中	0+1	0+1	2+1?	2+1	2+1	0+1, 2+1

形容詞

1類	アカイ	赤い	0	0, 2	0	0	-	0
	アマイ	甘い	0	2	0, 2	0	-	0

ここからわかるように、周辺地域のアは従来の報告とほぼ一致するが、(3) は一部の語 (3拍名詞5類など) で若干共通語化しているのかもしれない。

香取地区の話者について。⑧は、単語読み上げでも、2拍名詞2類に頭高型が少し現れる点などが、讃岐式の影響を思わせる（自由会話で讃岐式だから当然）。⑩の「血」もそうかもしれない。それ以外の点では、⑧～⑩の三名とも、若干外輪式的特徴を持つが（2拍名詞2類の0など）、およそ中輪式で調査票を読んでいる。周辺地区の話者に比べて、はるかに共通語アに近い（3拍名詞6・7類の一部の語を参照）。

助詞ノのアは、讃岐式ア（香川県・香取）・周辺地区ともに順接だが、⑧～⑩の香取地区東京式では、共通語と同じく、語末核型についた場合に無核化する現象が見られる。3拍形容詞の1・2類の区別も、香取の若い世代でのみ失われつつある（首都圏の若い世代と同様の変化）。

なお、若い香取の話者⑨は、自分たちの言葉が周辺地区と違うという意識を持っている。

周辺地区でも、香取地区同様の、若い世代の調査を行い、両者を比較することが必要である。

#### 4.7 若干の音響分析

今回の調査は必ずしも音響分析を目標としたものではなく、録音状態が悪いものが多いが、それなりのピッチ抽出もできたので、ピッチ曲線を提示しながら考察を行う。将来に向けての予備的研究として、見て頂きたい。

ピッチ抽出は、「音声録聞見（フリー版）」（今石編2005付属）による。ピッチ抽出の条件は、ソフト初期値を若干変更した。原則的には、Frame Shift 5m sec、Silent Level 300、F0Maxは男性話者200Hz・女性話者240Hz、F0Min60Hzとしたが、録音状態の関係で、Silent Levelを以下3名の話者について変更した：話者③180、話者④50、話者⑨600、話者⑩30。

録音機は、話者②③④⑤⑦⑧⑩がソニーTCD-D8とECM-MS957[岸江・吉廣]、話者⑨(1)がソニーTCS600と内蔵マイク[中井]のアナログテープレコーダーである。後者の録音はやはり雑音を多く拾ってしまっている。

次次頁以下、3頁にわたって波形を提示する。

各々の波形は、上から下に「原波形・F0・パワー」の三つがセットとなる。真ん中のF0に、特に注目されたい。

最初の2頁（波形図1・2）はすべて、②③④⑤⑦⑧⑨⑩(1)の9名の話者の、「カエル(蛙)、ネズミ(鼠)」「クルマ(車)、ハナジ(鼻血)」の発話である。左から右に、この順に音声を編集して並べたが、実際の調査票の配列は、「カ

エル(蛙)、ネズミ(鼠)」が一続き、「クルマ(車)、ハナジ(鼻血)」が別の箇所の一続きである。

最後の1頁(波形図3)は、各話者とも、「庭がある、鼻がある」(一続き)、「針がある、傘がある」(一続き)の発話を編集して並べたもの。こちらは話者②③④⑤⑦のみの結果を掲げる。話者②のみ、「庭がある、鼻がある」を2回繰り返している。

波形図1から、讃岐式のH式とL式は、音調の高さの違いが小さく、L式の文節内の上昇も、度合いがそれほど大きくない(但し卓立がある場合は除く)こと、H式にはゆるやかな下降が見られることがわかる。但し、一定量の発話からの帰納や、近畿中央部・共通語などとのきちんと比較が必要である。

波形図2から、香取地区内で聞かれる東京式⑧~⑩のうち、もっとも若い話者⑩を除く⑧⑨について、ゆるやかな下降が見られるのが興味深い。讃岐式のH式の特徴をそのまま保存したものかと思われる。一方、周辺地区東京式の話者(1)は1拍卓立(この場合は無核だから文節末の卓立)が目立ち、ゆるやかな下降とはかなり趣を異にする。

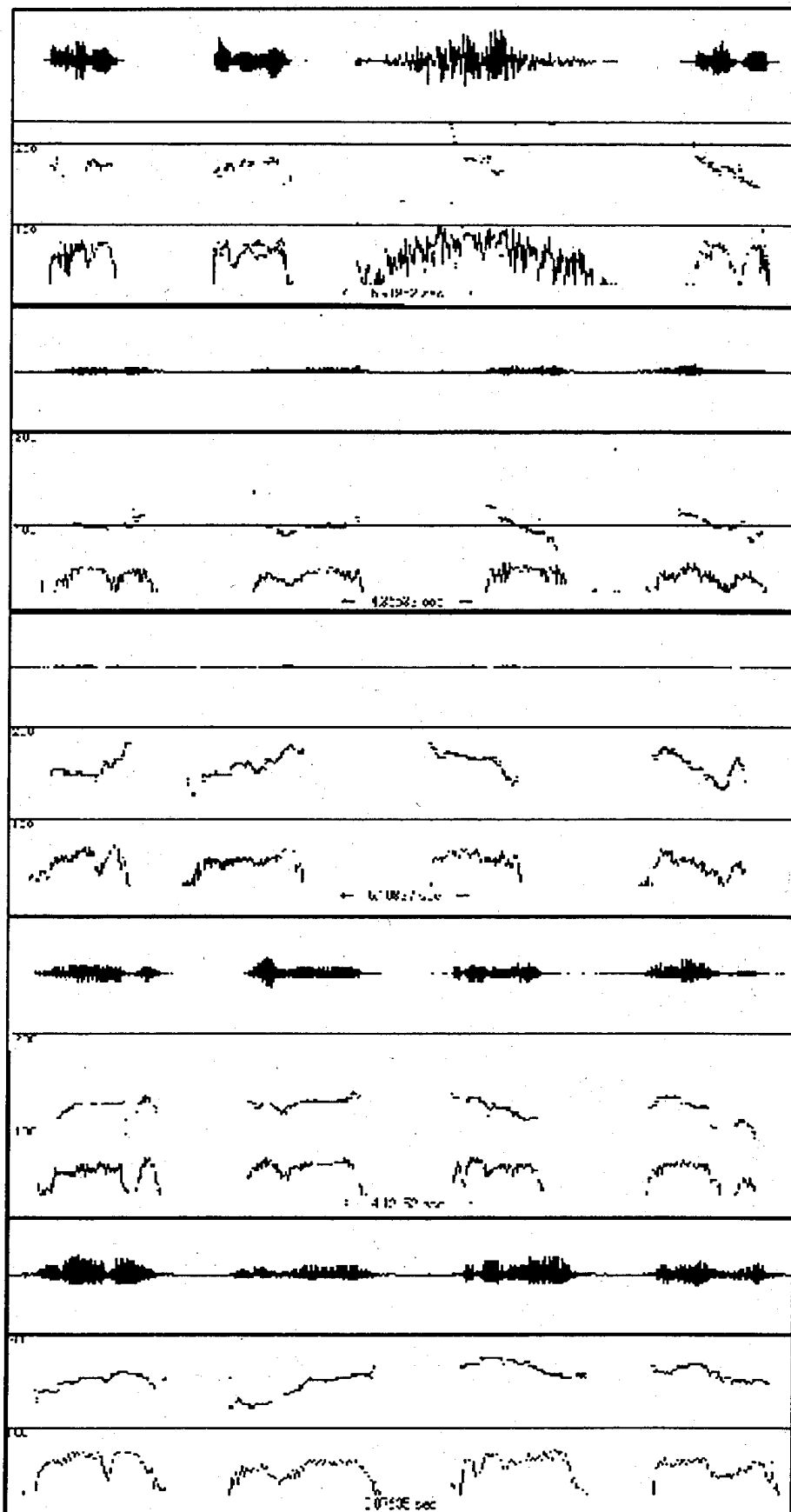
波形図3の連語の音調は、4.4.1で述べたように、複雑である。H0+L0の「庭がある、鼻がある」とL0+L0の「針がある、傘がある」に分けて考える。

H0+L0の「庭がある、鼻がある」について。話者②のピッチ曲線から、少し分かりづらいかもかもしれないが、左端の2つは、「ゆっくり丁寧」の発話で、ガのあとで明瞭に下がる。真ん中の2つは「すっと」読んでもらったものだが、ガのあとであまりり下がっていない(末尾のルが上昇しているのは、発話に自信がなくて調査者に問い返している音調)。また、話者④⑤も、「ゆっくり丁寧・助詞卓立・やや切れ目あり」などで発話していることが原因か、ガの後に明瞭に下がる。

一方、③⑦はガのあとでそれほど急激には下がらない。曲線の傾きとしては、ニワガ・ハナガの部分がなだらかに下がり、その曲線の傾きが、そのままアルの部分に続いているように見える。アルの部分ではH0とL0の対立が失われている可能性もある。

次に、L0+L0の「針がある、傘がある」について。ハリガ・カサガの部分の上昇の度合いが小さく、早上がりの的なものが多い。アルがガに低接しているのは、話者⑤の一部(カサガアル)と②④で、話者③⑦はほとんど同じ高さで付き、そのままの高さを保つかわずかに上昇している。ここでは、音調の方向から、H0には紛れていないようである。

波形図1 カエルL0、ネズミL0、クルマH0、ハナジH0(讃岐式)



②1922綾歌町女

「クルマ」は扇風機  
+調査者の声との重なり  
でピッチ抽出不能。

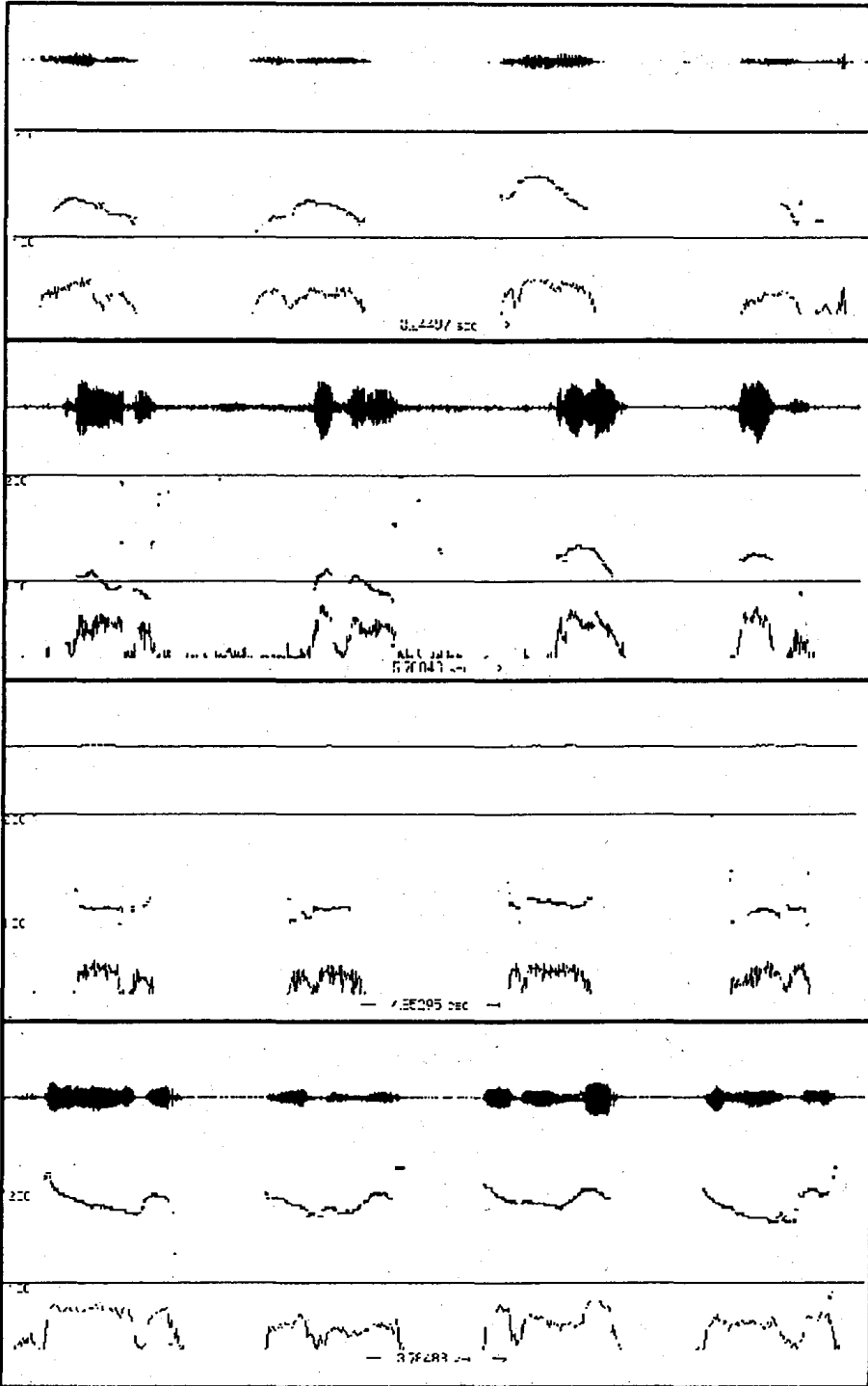
③1929綾歌町男

④1930飯山町男  
L0型の末尾の卓立が著  
しいが、おそらくは強  
調によるもの。

⑤1942詫間町男

⑦1953男(2世. 綾歌出  
自)

波形図2 カエル0、ネズミ0、クルマ0、ハナジ0(東京式)



⑧1965男

ハナジ末尾は紙をめくる音が重なっていて、ピッチ抽出不能。⑧⑨とも、ゆるやかな下降がみられ、それは讃岐式のH式の特徴を受け継いだものかも。

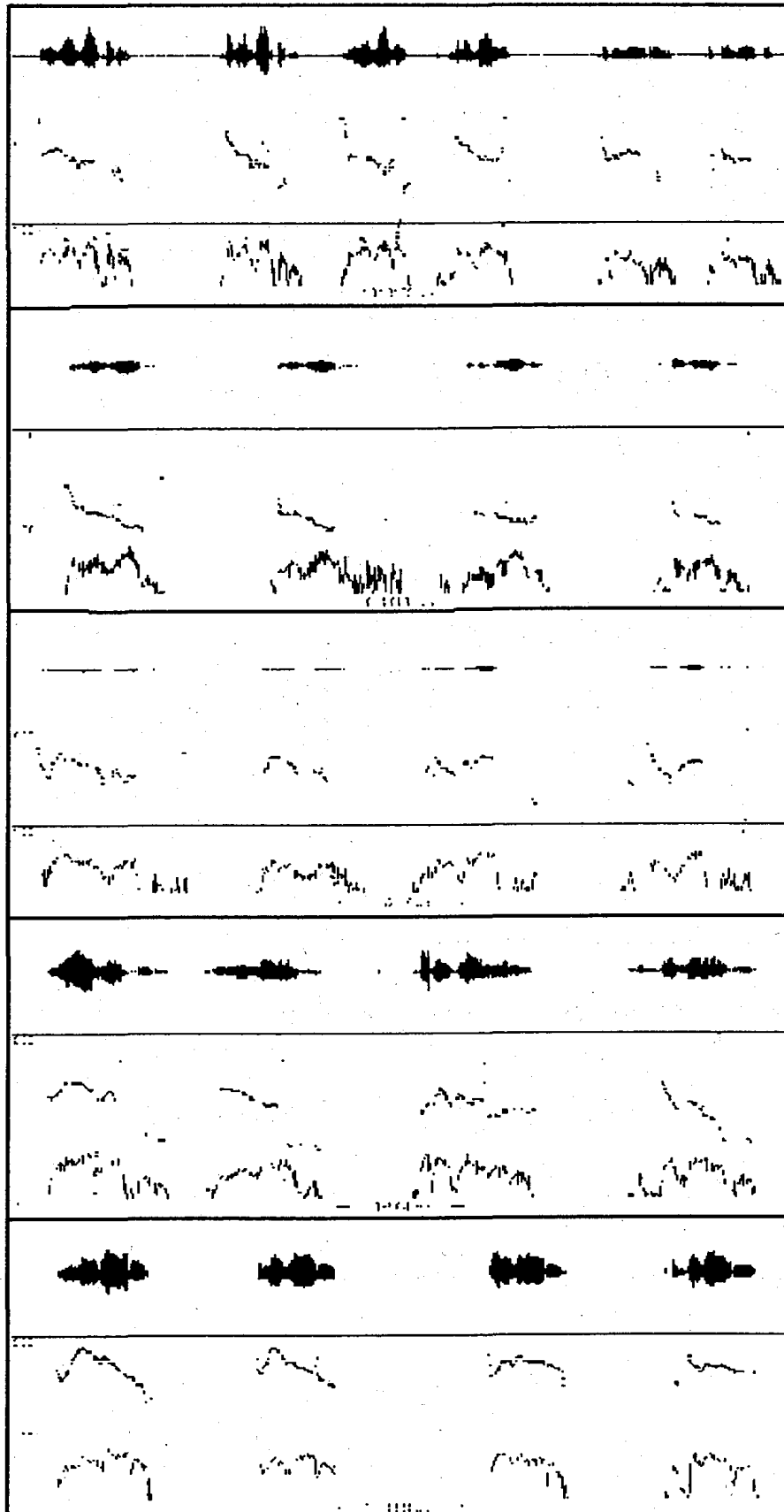
⑨1972男

上記⑧を参照。

⑩1986男 上の⑧⑨よりも下降の度合いが小さい。録音状態がよくないが、聴覚印象はこれと矛盾しない。

(1)1930女[周辺地区] 文節末の1拍卓立が著しい。若干重起伏調的な波形である。

波形図3 ニワガH0アルL0、ハナガH0アルL0;ハリガL0アルL0、カサガL0アルL0



②1922綾歌町

「ニワガアル、ハナガアル（ガの後に切れ目）、ニワガアル、ハナガアル（スムーズに。末尾上昇は調査者への確認疑問イントのせい）、ハリガアル、カサガアル」

③1929綾歌町

④1930飯山町

L0型名詞の末尾の強調卓立が著しい

⑤1942詫間町 カサガアルのみガの卓立が目立ち、その反動でアルが弱く低くなっている。

⑦1953(2世. 綾歌出自)



岸江・吉廣両氏から、(a)録音した音声そのままのファイルに加えて、(b)音圧を最大化した音声ファイルも頂戴した。そこで、両方のファイルからピッチ抽出を試みたが、ソフトでSilent Levelの調整を行うことによって、さほど変わらない結果となったので、(a)録音した音声そのままのファイルを使用した。この件について両氏には非常に御世話になった。厚く御礼を申し上げる。

#### 4.8 アクセントに関するまとめ

アクセントに関する調査結果のまとめは4.1に述べたとおりであるが、なおいくらか付け加えておく。

香取地区においては、周辺地区のアクセントの影響と共通語化は、2世の一部から兆しはじめ、3世に至って非常に顕著となる、ということが明らかになった(4.3節参照)。

平山(1978)によれば、有型アが分布する地域から、別の体系の有型アが分布する地域に移住した場合、2世からすでに移住先のアクセント体系を持つようになるという。但し、この論文は、おそらく集団移住を扱ったものではない。一方、集団移住を扱った西村(1990)によれば、奈良県内の東京式分布域から中央式分布域への集団移住について、東京式から中央式分への変化は、平山論文の報告より遅れるという。今回も集団移住を扱ったわけだが、その結果は後者に近いといえよう。

ただ、共通語化が著しい現在では、残念なことに、周辺地域の方言の影響に加えて、共通語化が覆い被さっており、移住者の方言と周辺地域の方言との関係を明らかにすることが困難になっている。このような現状を踏まえた上で、様々の性格を持つ集団移住の事例研究を増やしていく必要がある。

## 5. 語彙

語彙は数項目のみを取り上げる。

### 5.1 「(店で) 下さい」

**結果：** a. 香取地区内の店で：①⑤ツカ(以上三豊郡出身)、②③イタ(但し店ではクダサイが多く、家の中などでイタが多い)、⑨クダサイ(以上綾歌町など)。 b. 違う村の店で：①②⑤⑨クダサイ、但し①ゴセイヤ、②ゴシナイヤなども聞く。

**考察：**三豊郡では本来ツカで、綾歌町ではイタ。その地域差がそのまま保存。

但し主に若い層では共通語化でクダサイ、鳥取県方言のゴセイ、ゴシナイ（後者待遇度高）は聞くだけで自分では使わない。

## 5.2 「(暑い) なあ」

結果：a. 香取地区内の同年配の親しい人に：①②③⑤アツイノー。⑨アツイナー。b. 違う村の親しい人に：①②③⑤⑨アツイナー（敬語なら①オアツゴザマスナー、②アツイデスナなども）

考察：三豊郡・綾歌町など香川県西部では、ナーが目上に、ノーが目下に使われる。香取地区内ではこの使い分けに従っているが、違う村の人には、親しい人でもナーのみを使っている。ノーは讃岐弁という意識があってよその村の人と話すときには避けられるのだろう。

## 5.3 知っているが使わない鳥取県の俚言

この他に、鳥取県の「方言」として意識されているが自分たちは使わない、という回答が得られたものに、ダンダン（①②③⑤。ありがとう。アリガトー、オーキニを使う）、イケン（①②③⑤⑨。だめだ。イカンを使う）、などがある。

## 5.4 知らない鳥取県の俚言

知らないとされた鳥取県方言に、以下のようなものがある。トーギミ（玉蜀黍。但し⑤のみ聞き、讃岐でトーキビ、最近ではトーモロコシ、コーンなど）。ブーワ・タイタイ（魚の幼児語。讃岐では①③ビー、②ビンビ、④オビー）。「聞き手のところに行く」意味のクル。これらは鳥取県でもあまり使われなくなっているのかもしれない。

# 6. 年中行事

## 6.1 年中行事の少なさ

讃岐の年中行事は、香取では、開拓当初から現在に至るまで、それほどには行われていない。もちろん、開拓当初の生活難もあった。しかし、より根本的な理由は、出自の香川県綾歌町域が水稻栽培を中心とする農村であるのに対して、香取は、かつては畑作・後に酪農を主産業とする集落であり、両者の生活形態が異なることだと考える。

たとえば、話者①によると、讃岐では、田植えが終わるとアジアライヤスミなどと言う農休日があった。そこで、香取でも農休日を作ろうという提案が、かつてあった。しかし、畑作だと地区全体で休みを取ると収入減につながるというので、農協総会で否決されたという。また、讃岐の農休日は嫁の里帰りの

意味もあったが、香取では姑が存在せず、必要性が薄かったという。開拓地特有の事情もあったのである。

春の彼岸・お盆・秋の彼岸には、各家で先祖の霊の供養をすることも、もちろんだが、香取地区の共同墓地での物故者慰霊祭が重要な意味を持っている。また、毎年1月2日に行われる新年互礼会、11月11日の入植記念祭（1節参照）など、香取開拓団の行事が大きな比重を占めている。

香取地区の神社としては、岩伏神社<sup>いわぶせ</sup>があり、そこで10月5日に祭礼がある。以前はその日に運動会をやったが、現在では公民館で演芸会を行う。

## 6.2 行事食

行事食などには讃岐の面影を留めている。開拓当初は生活に追われたが、1955年前後、世の中が落ち着きだすと、故郷を懐かしみ、讃岐の食べ物が復活したという。

たとえば、正月の雑煮は、話者①②③は、餡入りの餅が入った雑煮をする（②③は赤味噌、①は赤味噌・あるいは醤油）。（話者⑤は餡餅入りの雑煮をしないが、これは香川県内の出身地の違いのためか。県周辺部では餡なしの雑煮も多い）。また、話者③によると、何か行事があるごとにうどんを打つようになり、また、ばら寿司などもよく作るようになった。

もっとも、自然環境が異なるため、讃岐の食がすべてそのまま復活したわけではない。たとえば、5月5日には、讃岐では山帰来<sup>やまかえり</sup>の葉で包んだシバモチを作ったが、香取は冷涼なため、この日には、まだ山帰来<sup>やまかえり</sup>の葉は出ていないので、作らない（話者①）。しかし、柏の木はあるので、人によって、その葉でカシワモチを作る（話者②）。今ではもちろん菓子屋<sup>かしわ</sup>で買ってくることも多い。

また、讃岐では、ハルウオ<sup>さわら</sup>と言って、春に鱈を一匹買ってきて食べたり、嫁に鱈を持たせて里帰りをさせたりする習慣がある（話者④によるとムギウラシと郷里で言った）。しかし、鳥取県では瀬戸内ほどには鱈が珍重されないためか、香取地区でも、周辺地域にならって、冬の鱈<sup>ぶり</sup>が重視されるようになった（話者⑤）。行事食の面でも、移住先の影響を徐々に受けてきているわけである。

## 7. アスペクト

### 7.1 香取地区のアスペクト調査報告にあたって

移住者の言語を観察する醍醐味は、移住後すでに半世紀に近い時間が経過しているにもかかわらず、依然として移住元の言語を残していることである。重要なのは言語といっても単に個別的な語彙などのケースに止まらず、言語体系そのものを移住先の言語の影響を受けずに維持している点である。これは移住者一世ならそのようなことも当然あるわけだが、二世、場合によっては三世においても一世の言語体系をそのまま受け継ぐ形で移住元の言語体系を保持しているケースもある。

ここでは、このような点を念頭において香取地区のアスペクト体系を取り上げ、言及してみることにしたい。

西日本諸方言におけるアスペクト体系のありようは、以下に述べるように、西日本の大半の地域においてほぼ共通した形の体系を維持している。移住元の香川県下の諸方言におけるアスペクト体系もおおまかに述べると、西日本諸方言一般に共通するということができよう。一方、移住先の大山町のアスペクト体系は山陰地方の出雲市や米子市にみられるものと似ており、香川県諸方言に多くみられるものとは区別される。

香取地区での調査結果をみるまえに西日本諸方言アスペクトの特徴に述べるとともに、移住先の大山町をはじめ、地方都市の米子市の方言アスペクトについても触れてみたいと思う。

### 7.2 西日本諸方言におけるアスペクトの特徴

西日本諸方言のアスペクトの最も代表的なパターンはアスペクト形式に完了／未完了の対立があることである。完了／未完了はパーフェクト／インパーフェクトと呼ばれることもある。

工藤(1998)は、共通語のように、西日本的な完了／未完了の対立がなく(いずれの場合もシテイル)、ただスル／シテイルが対立するパターンを二項対立型と呼んでいる。一方、完了／未完了の対立をヨル／トルで言い分けるような西日本一般の方言ではスル／シヨル／シトルが対立するパターンとなり、これを三項対立型と呼んでいる。ただし、西日本諸方言の中にはいろいろなヴァリエーションがみられ、この対立の様相が異なったり、方言によっては三項対立というよりも二項対立であったりする方言も存在している。むしろ現代の西日本の大半の方言においては、この三項対立がほぼ完全に保たれている方言とい

うのは皆無に等しいとも言えるであろう。「完全に保たれている方言」とは、具体的にいうと、完了／未完了という対立があらゆる動詞においてみられ、全面的にシヨル／シトルが対立する方言をさす。また、「皆無に等しい」とはこのようにあらゆる動詞において全面的に対立するような方言は西日本諸方言において見出し難いという意味である。

木部・工藤(2000)による報告によっても、九州や中四国の諸方言においても全面对立型(完全な三項対立型)なる方言は容易には見出しにくいということである。

例えば、三重県の津・伊勢方言では完了／未完了の対立があらゆる動詞においてみられず、シトル一本だけの、いわゆる二項対立型であるが、西日本から中部地方にかけての諸方言の地理的な分布状況を考慮すると、もとは三項対立型だったものが二項対立型へと変化したと推定することができる。ほかにも島根県出雲地方なども同様にシヨルのみで完了と未完了の両方を表す二項対立型の方言である。このような状況から大局的には西日本の諸方言では三項対立型パターンは二項対立型へと進みつつあるという仮説を立てることが可能である(工藤 1998)。

また、大阪、京都を中心とした関西中央部方言のアスペクト形式はテルのみで完了と未完了を表し、二項対立型である。ヨル・トルといった形式が関西中央部でも用いられるものの、これらは他の西日本の方言とは異なり、アスペクト形式ではなく、もっぱら「待遇」を表す形式となっている。

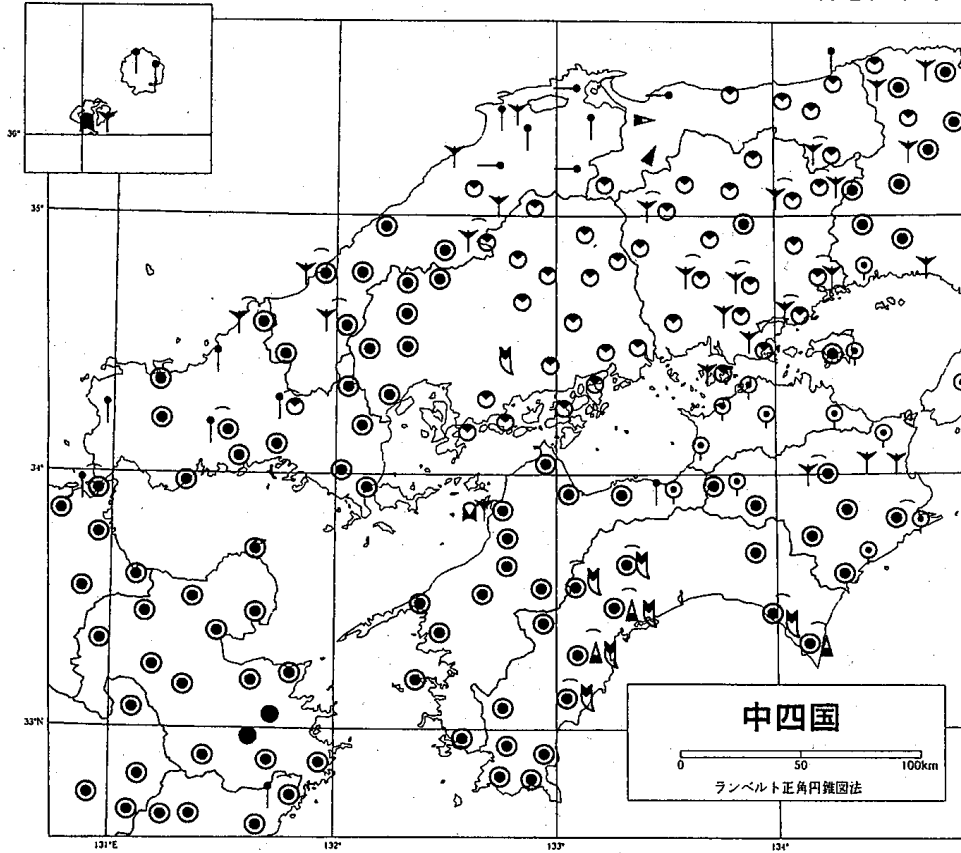
国立国語研究所(1999)には、方言文法を対象とした全国地図の分布図の中にアスペクト関連の地図が掲載されている。

香川県各地と鳥取県西部に位置する大山町のアスペクト形式を分布上から比較することが可能なので国立国語研究所(1999)『方言文法全国地図』の中四国の部分だけを取り出して作図し直してみた。利用した地図は、第4集の第198図「散っている〈進行態〉」と第199図「散っている〈結果態〉」の2図である。これらの項目を大山町香取地区でのアスペクト調査では質問項目として扱わなかったが、アスペクト上、「散る」という動詞とほぼ近い意味を持つと思われる動詞を扱っていること、進行態と結果態との使い分けといった観点からの調査を試みているのでこれらの観点から十分比較することが可能である。

198図(進行態)と199図(結果態)には両図を比較して分かるように、中四国(および九州の一部)ではヨル系／トル(チョル)系の対立に代表される明瞭な三項対立型であるといえる。

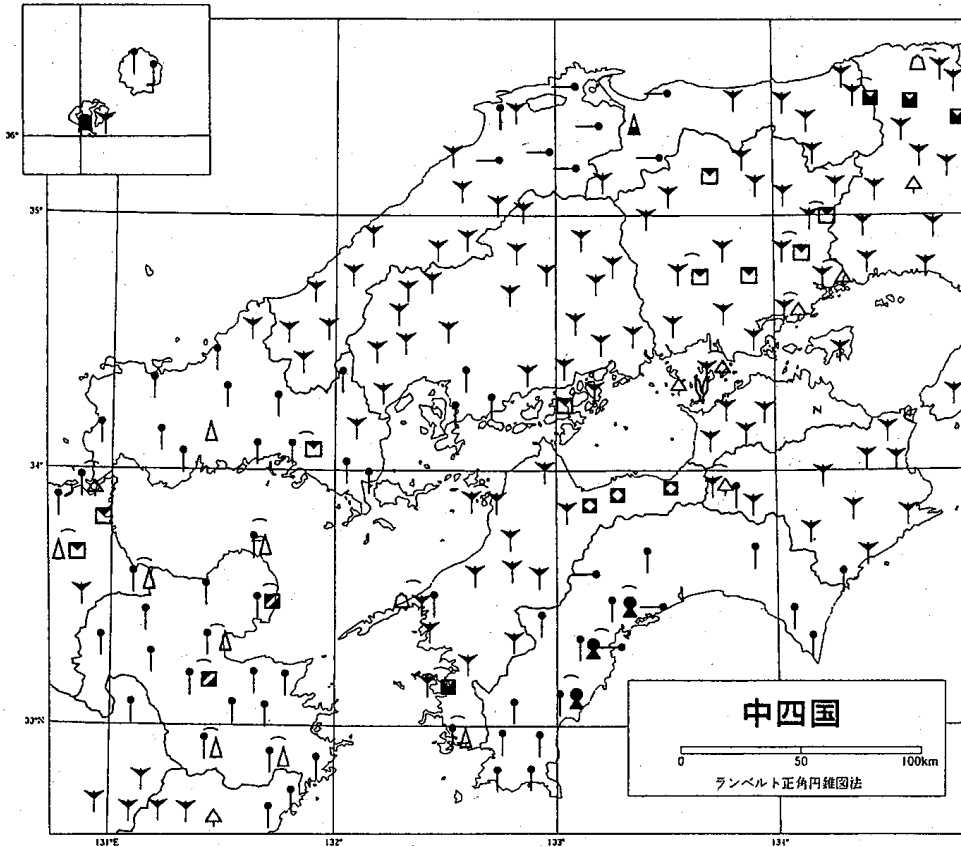
ただし、先に述べたように、島根県出雲地方を見ると、進行態(未完了)で

方言文法全国地図 (国立国語研究所) 198 散っている (進行態) より



- ◎ チリオル系
- チリオル系
- チリョール系
- ⊙ チリョール系
- チリオル系
- ▲ チリョー系
- ▶ ツリョー系
- ◀ チリョー系
- ♣ チリユー系
- ↑ チッチョル系
- チッチョー系
- ∟ チットル系
- ⊞ チツテイル系
- チツテオル系

方言文法全国地図 (国立国語研究所) 199 散っている (結果態) より



- ▲ ツツチョー系
- ♣ チツチュー系
- ↑ チッチョル系
- チッチョー系
- ∟ チットル系
- △ チツテル系
- チツテオル系
- ⊞ チツテシモータ系
- チツテシマッタ系
- ⊞ チツテシモタ系
- ⊞ チツチシモータ系
- △ チツテシモートル系
- ♣ チツテスンドル系
- △ チツテシモチョル系
- N 無回答

結果態（完了）のトル（ Chol ）系がまとまって分布しており、中四国においてこの地域は未完了／完了の対立がない地域であるということが出来る。つまり、進行（未完了）と結果（完了）の形式がトル（ Chol ）系一本で同じになっているのである。地図からはその東部に位置する鳥取県米子市およびその近郊の町村の状況を詳細には知ることができないが、一応、進行態でヨル系の形式（例えば、米子市でツリヨ一）が確認でき、未完了／完了の対立があるようにも受け取られるが、今回の香取地区調査での報告や、別途、米子市在住の話者に対して聞いた結果からはこの対立の有無は微妙である。伯耆町溝口などの岡山県より山間部の地域には対立があることを確認済みだが、米子市や大山町を含む鳥取県西部では特に中若年層ではほぼ完全に未完了／完了の対立を欠く二項対立型へと進みつつあるとみて差し支えないと思われる。

一方、移住元である香川県各地の状態はヨル系／トル系の対立がほぼ全域に見られ、他の中四国と同様、三項対立型である。進行態の形式面でチツリヨルといったラ行音の直前に促音がはいるという珍しい形が香川県では一般的なようである。

### 7.3 香取地区調査と米子市・大山町・伯耆町での電話調査

アспект調査項目に関してのみ、香取地区での調査のあと、電話等による聞き取り調査を米子市、大山町、伯耆町などで行った。これは、香取地区の移住者のアспект体系と、いわゆる地元の在地的な方言話者のアспект体系との間にどういった違いが見られるのか、その比較を行いたいという目的のためであった。各地公民館に電話をし、電話に出られた公民館の館員の方をお願いし、アспект関連の調査を行った。突然、電話をして質問するという形をとったので、土地の生え抜きかどうかということと、生年については聞くことができたが、それ以外の詳細な話者情報に関する質問は控えることにした。以下の6名の方々からアспект項目について御教示を得ることができた。

以下、「3. 話者の一覧」で示している香取地区の話者①～⑩と同様、左先頭に与えた番号(1)～(6)で話者の方々を示すことにする。香取地区の話者から得た調査結果をメインに据え、随時、電話調査による報告と比較していくことにしたい。

なお、香取地区の話者①～⑩で、アспектの調査は①②③④⑤⑦⑧⑩の8名に対して実施し、⑥⑨ではできなかったことを断っておきたい。香取地区以外での話者情報は下記のとおりである。

番号	地域	生年	性別
(1)	伯耆町溝口	1971	男性
(2)	米子市大崎	1944	男性
(3)	米子市彦名	1961	女性
(4)	大山町名和	1944	男性
(5)	大山町名和	1962	男性
(6)	大山町中山	1963	男性

#### 7.4 アスペクト調査結果について

アスペクト調査の項目順に結果を見ていくことにしたい。記述の方針として、各調査項目において香取地区での調査結果を先に報告し、そのあと、香取地区以外（伯耆町、米子市、大山町）の調査結果を報告するという手順をとる。

##### 7.4.1 主体動作動詞（他動詞）飲む（テンス現在）

《動作開始直前》について香取地区の話者では、②④⑤⑦⑧がノンミョルとるようにアスペクト形式のヨルを使うと回答した。ノンミョルは讃岐一般でよく聞くアスペクト形式である。

①がノムゲナゾ、⑩はノモートシトルで「飲みそうだよ」「飲もうとしている」にあたる他形式によるものを回答した。これらの形式を以後、工藤（2000）にしたがい、「分析的形式」と呼ぶことにする。厳密には開始直前を表す場合にノモートシヨル、ノミカケヨトシヨルなどのように「分析的形式」＋ヨルで表現する場合が西日本諸方言一般に多くみられるのである（工藤 2001）。

香取地区以外の周辺の生え抜き話者による結果は以下の通りである。(1)(2)がノモートシチョー、(5)(6)がノモートシヨル、(3)がノミカケトル、(4)がノモートシヨルであった。いずれも分析的形式であり、アスペクト形式のヨルを使って直接あらかわすケースはなかった。

《動作過程継続》では①③④⑤⑦⑧がノンミョル、②がノミヨル、③⑤⑩がノンドルをそれぞれ回答した（③⑤はノンミョルとの併用）。西日本の方言では「飲む」などの非内的限界の動詞ではヨル／トル対立がなくなり、ヨル・トルが競合するパターン（動作過程継続においてヨルのほか、トルも使えるという場合）が圧倒的に多くなっている。ノンミョルとノンドルの併用ケースが見られるのはまさにこの傾向に沿ったものであるといえる。

ところで⑩だけはトル系専用でヨル系の使用がみられない。この話者は祖父



が讃岐出身、父親が香取生まれで、本人も香取生まれの、いわゆる移住3世である。讃岐的なアスペクト形式は現れず、米子方言にみられるアスペクト形式を用いていると思われる。

香取地区以外の話者では(1)ノンドー(新)・ノンジョー・ノミヨー、(2)ノンジョー、(3)(4)ノンドル、(5)(6)ノンジョルである。基本的に動作過程継続をトル系であらわす方言が多そうであるが、(1)伯耆町溝口の話者はヨル系のノミヨーを回答した。ヨル系は岡山寄りで用いられると考えられるが、さらに多くの話者にあたるべき必要性を感じる。米子市や大山町ではトル系で島根県との関連性が大きいと考えられる。今回、香取地区の話者の内省でも香取以外の地域ではノンジョル・ノンジョーという形式がよく使われているという報告があったが、これは電話調査による結果とほぼ一致した。

《痕跡》では①②③④⑤⑦⑧⑩の全員がノンドルを答え、③④⑤はノンジョル・ノンジョーを地元の形式だと内省した。

香取地区以外ではこの報告通り、(1)(2)ノンジョー、(5)(6)ノンジョルであったが、(3)(4)ノンドルであった。トル系のなかでもノンジョルとノンドルについては一般的にノンドルの方を新しいとする報告があった((1)による内省)。

《反復習慣》では香取地区で②④がノンミョル、①⑦⑧⑩ノンドル、⑤はノンミョル・ノンドルを併用するという形となった。工藤(2000)は「〈反復習慣〉の意味は、ヨル系形式は全動詞において表すが、トル系形式が表せるかどうかには、非内的限界動詞と内的限界動詞の間で、段階差が認められる。前者の方がヨル系形式とトル系形式との競合が起こりやすい」と述べており、まさにこの結果を裏づけているものと思われる。つまり、移住言語の観点からみて、例えば、ここでのトル系とヨル系との競合が、米子方言や大山町の方言に影響よって起きているとみるよりも非内的限界動詞に分類される「飲む」の《反復習慣》に競合が起きているとみるのである。

香取地区以外では(1)(2)(6)ノンジョー、(3)(4)ノンドル、(5)(6)ノンジョルですべてトル系であった。

#### 7.4.2 主体動作客体変化動詞 開ける(テンス現在)

《動作開始直前》について香取地区の話者では②③④⑤⑦⑧アケヨル、①アケル、⑩アケオートシトルである。本来、西日本諸方言一般ではアスペクトの意味として、〈将前・非現実〉のケースでトル系で表現するということはなく、ヨル系にしても一般によく用いられるわけではない(工藤 2000)。この点からみると、香取地区の話者は他の西日本の諸方言一般と比べてもヨル系での使

用が安定しているほうであるといえよう。

香取地区以外は(1)アケヨートシチョー、(2)アケカケチョー、(3)(4)アケヨートシトル、(5)(6)アケヨートシチョルであった。いずれも「分析的形式」+トル系となっている。ヨル系の使用はみられない。

《動作過程継続》では①②③④⑤⑦がアケヨルであるが、注目すべきは、移住者2世にあたる話者⑧(1965年生まれで全話者中、二番目に若い)はアケヨルとアイトルを併用すると答えており、ヨル系とトル系の競合が起きているという点である。⑩の移住者3世ではヨル系の使用はなく、トル系一本であり、まさに体系的に次にみる米子や大山などの方言と一致する。

香取地区以外では(1)アケヨー／アケチョー、(2)アケチョー、(3)(4)アケトル、(5)アケトー／アケチョー／アケチョル、(6)アケチョルという結果である。(1)ではヨル系が使用される点が他の地域と異なり、注目されるが、ヨル系とトル系が競合している点は香取地区とは大きく異なる。「開ける」などの限界動詞では讃岐方言一般にはトル系との競合を許していないわけであり、香取地区の話者はまさにこれに準ずるものなのである。

《客体結果》では香取地区全員がアケトル(但し、⑧⑩の場合は性格を異にすること、すでに言及したとおりである)であり、《動作過程継続》のアケヨルと完全にアスペクト対立をみせるということができよう。

香取地区以外では(1)(2)アケチョー、(3)(4)アケトル、(5)アケトー／アケチョー／アケチョル、(6)アケチョルであり、香取地区とは非常に鮮明な相違をみせた。すなわち、香取以外の地域では一部を除いて《動作過程継続》と《客体結果》の表現形式に差が見られないという状況である。

《反復習慣》では香取地区で②⑤アケヨル、③④⑦⑧⑩がアケトル、①がアケヨル・アイトルを併用するという結果となった。工藤(2000)はこの点に関して、「〈反復習慣〉も、〈動作進行〉とは、一回的なアクチャルな進行か反復的なポテンシャルな進行かで異なるが、『毎日窓を開けヨル』のような場合、反復的動作・変化の必然的終了限界はないとすれば〈動作進行〉と同様に、ヨル系形式とトル系形式との競合が起こっても不思議ではない」としており、アケヨルとアケトルの両形式が現れたことに関して、西日本一般に起こり得る変化であると判断できる。したがってここでもヨル系とトル系との競合は香取以外の方言の影響によるものとは考えられないということになる。

香取地区以外では(1)(2)アケチョー、(3)(4)アケトル、(5)アケトー／アケチョー／アケチョル、(6)アケチョルであり、トル、トー、チョル、チョーといった形式上の違いはあれ、いずれもトル系一本という点で共通している。

### 7.4.3 主体動作客体変化動詞 開ける (テンス過去)

調査の項目がアスペクト項目だけではなく、アクセント、音声、語彙、民俗等の多くの項目に及んでいるため、アスペクト項目調査に関して均整のとれた調査項目を配置できるまでには至らなかった。例えば、テンスとの絡みで調査項目全般にテンス現在、過去というように調査項目が立てられなかったというわけである。しかし、部分的にはあるが、「開ける」のように (テンス過去) についての項目を立てたものもあるが、全般的に不揃いであることをここで断っておきたい。

さて、《動作開始直前》で香取地区では①②③④⑤⑦アケヨッタ、⑧⑩がアケオートシトッタという結果でヨル系は回答されなかった。テンス過去においても全般的にヨル系が使われている点は注目に値する。

香取地区以外では(1)(5)(6)アケオートシチョッタ、(2)アケカケチョッタ、(3)(4)アケカケトッタである。(5)アケオートシトッタは併用である。「分析的形式」+トル系となっている。

《動作過程継続》ではテンス現在のとき、①②③④⑤⑦がアケヨルであったが、テンス過去になると、①②③④⑤がアケヨッタで、⑦はアケヨッタとアケトッタを併用する。⑧⑩はアケトッタのみの使用。⑦は年齢的には8人の話者中、6番目に若い。ヨル系とトル系の対立が⑧に次いでこのテンス過去のケースでなくなっている。「開けていた」という場合にはヨル系とトル系の対立が希薄となるのかどうか、例えば、讃岐方言などでも、比較的若い層にこのような現象が起きているかどうか確認したいところである。

香取以外の地区では(1)(2)(5)(6)アケチョッタ、(3)(4)アケトッタである。

《客体結果》ではテンス現在同様、香取地区全員がアケトッタ (但し、⑧⑩の場合は性格を異にすること、すでに言及したとおりである) であり、《動作過程継続》のアケヨッタと①②③④⑤がアスペクト対立をみせている。

香取以外の地区では《動作過程継続》の場合と全く変わらず、(1)(2)(5)(6)アケチョッタ、(3)(4)アケトッタである。

《反復習慣》ではアケヨッタ①⑤⑦、アケトッタ②③④⑧⑩である。これはテンス現在で言及したことでいうと、ヨル系でもトル系でも差し支えないということになる。テンス現在、テンス過去との比較で個人によってヨル系、トル系の回答が定まっていないという理由もこのあたりから判断できそうである。

香取地区以外では、(1)(2)(5)(6)アケチョッタ、(3)(4)アケトッタでトル系一本であり、《動作過程継続》《客体結果》の場合とほぼ同じである。

《完成相》香取地区、香取以外の地区全員がアケタを回答した。

#### 7.4.4 主体動作客体変化動詞主体変化動詞 死ぬ (テンス現在) (無意志自動詞)

《動作開始直前》で香取地区では①②③④⑤⑦シンニョル、⑧シニョル、⑩シニカケトルである。シンニョルは讃岐的なアスペクト形式である。⑩以外は直前をヨル系で表現している。⑩は「分析的形式」+トル系を用いている。

香取地区以外では(1)(2)(5)シニカケチョー、(3)シニカケトル、(4)シニソーダ、(5)(6)シニカケチョルで、(5)は併用となる。

《動作過程継続》では①②③④⑤⑦シンニョル、⑧シニョル、⑩シニカケトルで《動作開始直前》の場合と全く同じ形式を回答した。

香取地区以外では(1)(2)(5)シニカケチョー、(3)シニカケトル、(4)(6)シニソーダ、(5)シニカケチョルを併用している。

《主体結果》では香取地区全員がシンドルであり、《動作過程継続》のシンニョル・シニョルと、⑩の話者を除いて全員が完全にアスペクト対立をみせている。この対立のパターンはまさに讃岐方言のパターンそのものであるといえる。

香取地区以外では、やはりここでもトル系一本となっており、(1)(2)(5)シンジョー、(3)(4)シンドル、(5)(6)シンジョルである。

《反復習慣》では④⑤シンニョル、①②③⑦⑧シンドルである。「開ける」の《反復習慣》のところで工藤(2000)の指摘でもみたように、反復であるがゆえに、変化の必然的終了限界はないとすれば、〈動作進行〉と同様、ヨル系・トル系が競合するというわけであり、ここでのトル系もまた、米子や大山などの近隣方言の影響によってトル系が使われ出したものではない。

香取地区以外では、(1)(2)シンジョー、(3)(4)シンドル、(5)(6)シンジョルである。

#### 7.4.5 主体動作動詞 (意志的自動詞) 遊ぶ (テンス現在)

《動作開始直前》でヨル系を答えたのは②④⑤である。②④⑤は純讃岐的なb音の前に促音がはいるアソッピョルという形式を答え、④⑤はこの形式が「香取弁」であると説明した。①アソブ、⑦アソボートショル、⑩アソボトシトルである。

香取地区以外では、(1)(5)(6)アソボートシチョル、(2)アソボートシチョー、(3)(4)アソボートシトルである。

《動作過程継続》では②④⑤⑦がアソッピョル、アソンピョルなどのヨル系を答えたが、①③ではアソッピョルのほか、アソンドルを回答した。ここでは、

ヨル系とトル系が対立しているというよりも競合しているのである。「遊ぶ」が非内的限界動詞であり、西日本諸方言のほぼ大半の方言でこの競合が観察されている(工藤 2001)。したがって②④⑤⑦についてもこの局面でトル系を使う可能性が大きいように思う。

アスペクト調査では単に第一回答を聞き出すのみという調査では不完全であり、まさにこの「遊ぶ」のような場合、ヨル系の他にトル系の使用が許されるか否かも一貫して確認し続ける必要があるわけである。複数以上の調査員が一つの調査にあたる場合、このあたりの確認が必ず取っておく必要がある。

なお、⑧⑩ではヨル系の使用がなく、トル系一本に統合されつつあるが、これは地元の米子や大山の方言の影響によるものであると思われる。⑧⑩二人の話者自身から、米子への通勤や米子での寮生活が続いており、このような事情が少なくともアスペクト体系に変化を及ぼしているとみられる。

香取地区以外では、(1)(5)(6)がアソンジョル、アソンジョーの両方を答え、(2)アソンジョー、(3)(4)アソンドルである。

《痕跡》では②③④⑤⑦⑧がアソンドル、①アソング、⑩アソンドッタである。トル系の回答が多かった。香取地区以外では、(1)(5)(6)がアソンジョル、アソンジョーの両方を答え、(2)アソンジョー、(3)(4)アソンドルで、まったく《動作過程継続》の場合とすべての話者で同じであった。

《反復習慣》ではヨル系とトル系にくっきりと分かれた。他の項目とも共通した現象である。②④⑤がアソツビョル、アソンビョルなどのヨル系を答え、①③⑦⑧⑩はアソンドルのトル系を答えた。③はアソンジョーを米子や大山の方言であると答えた。別の項目の《反復習慣》のところでも再三述べたようにヨル系とトル系に分かれるのは、香取周辺の方言の影響を受けたからではないといえるであろう。

香取地区以外では、(1)(5)(6)がアソンジョル、アソンジョーの両方を答え、(2)アソンジョー、(3)(4)アソンドルであり、6人の話者がともに《動作過程継続》《痕跡》のときと同じ形式を回答した。

#### 7.4.6 主体動作動詞(非意志的自動詞)降る(テンス現在)

《動作開始直前》でヨル系を答えたのはわずかに⑤⑧のみである。⑤フツリョル、⑧フリョルだが、⑧はフロートショルも併せて回答した。以下、①フリゾーナ、②フリダシタ、③無回答、④フルゾ、⑦フリカケヤ、⑩フロートシトルという具合である。一般にアスペクト調査で、開始直前をヨル系で表現するかどうかを聞き出すことが案外難しいのである。

香取地区以外では、(3)フリョール、(2)フロートシチョー、(1)(4)(5)(6)フリソーダを答えた。

《動作過程継続》では②⑤がフツリョール専用、①③⑦はフツリョールと同時にフットルを回答した。④⑧⑩がフットル専用であった。「降る」も非限界動詞というわけでヨル系とトル系との競合が西日本各地で激しい状況にある。

香取地区以外では(1)フリョール、フツチョー、(2)フツチョー、(3)(4)フットル、(5)フツチョー、フツチョル、(6)フツチョルである。

ところで(1)フリョールはヨル系で先の国語研の方言文法全国地図のところの「散っている(進行態)」のところにも現れている語形のチリョールにあたる形式と同じで、中国地方のうち、鳥取、広島、岡山各県にまたがって分布する形式である。

《痕跡》では①②③④⑤⑦⑧⑩全員がフットルで一致した。本来、《痕跡》で用いられるトル系が《動作過程継続》のところで用いられる。この現象をさして、工藤(1998)ではヨル系とトル系の競合というように表現している。

香取地区以外では(1)(2)フツチョー、(3)(4)フットル、(5)フツチョー、フツチョル、(6)フツチョルである。

《反復習慣》では②⑤フツリョール、④フリョールで以上がヨル系、①③⑧⑩フットルでトル系、⑦フツリョール、フットルの両系を答えた。ここも別の項目のところで既述したとおりである。

#### 7.4.7 存在動詞 ある(テンス現在)・あった(テンス過去)

例えば、愛媛県宇和島方言では、《一時的状態》などを示す時に「ごみがありヨル」というように他の動詞と同様に「ある」にもヨルがつくことがある(工藤 2001)。さらに「運動会がありヨル」というような方言はかなり多くあると思われる。

まず(テンス現在)だが、今回の調査では香取地区で「ある」にヨルがつく回答は皆無で全員がアルであった。

香取地区以外でもほぼ同じ状況であるが、唯一、(4)の話者が《恒常的特性》として、「学校の校庭には桜の木がある」の場合にアットルを回答した。

(テンス過去)でも香取地区では「あった」にヨル、トルがつく回答は皆無で全員がアッタであった。

香取地区以外でもほぼ同じ状況であるが、唯一、(2)の話者が《恒常的特性》として、「学校の校庭には桜の木があった」の場合にアツチョーを回答した。

#### 7.4.8 存在動詞 いる (テンス現在)・いた (テンス過去)

存在を表す動詞は、共通語「いる」に対して西日本諸方言でオルである。

香取地区、香取地区以外全体にオルに対して、ヨル系トル系がつく回答は皆無であった。

#### 7.4.9 形容詞 赤い (テンス現在)・赤かった (テンス過去)

(テンス現在) (テンス過去) いずれにおいても香取地区、香取地区以外のどの話者も「赤い」「赤かった」にヨル系トル系を付けた形式を答えた話者はいなかった。全員が (テンス現在) でアカイ、(テンス過去) でアカカッタを回答した。

#### 7.4.10 形容動詞 静かだ (テンス現在)・静かだった (テンス過去)

(テンス現在) (テンス過去) いずれにおいても香取地区、香取地区以外のどの話者も「静かだ」「静かだった」にヨル系トル系を付けた形式を答えた話者はいなかった。

(テンス現在) では《一時的状態》、《反復習慣》、《恒常的特性》に全般において香取地区で①②③④⑤シズカナ (ノー)、⑦⑧シズカヤ、①シズカダッタを回答した。香取地区以外では全員シズカダを回答した。

(テンス過去) でも《一時的状態》、《反復習慣》、《恒常的特性》に全般において香取地区で①⑩シズカダッタ、②③⑤シズカナカッタ、④⑦⑧シズカヤッタである。

## 8. 音声

### 8.1 香取地区の音声について

ここでは、香取地区話者の音声について若干の調査報告をする。出雲地方をはじめ鳥取県西部は、東北方言のような中舌母音のみられる特有な地域として知られる。とりわけ、音声は語彙や文法、アクセントなどに比べて変わりにくいものであると考えられるが、中舌母音のような音性的特徴を持たない香川県出身の話者が、香取地区という新しいネットワークの中で鳥取特有の音声と接する機会があったことを考えると、その際それらの音声とどのように向き合ったかということについて言及することは非常に興味深いことである。そしてそれが二世、三世に受け継がれているのか、といった世代差をたどっていくこと

もまた然りである。

本調査では、香取地区の話者が鳥取県西部の音声についてどのくらい影響を受けているのか、また、香取地区の話者の中でも世代差によって何か差がみられるのかということを中心に言及したい。

## 8.2 調査概要

今回調査を行った香取話者の情報は以下に示したとおりである。前章で中井氏が挙げたものとはほぼ同じであるが、音声に関しては以下の7名のデータが得られた。内訳は、話者①～③が香川県出身で一度満州や九州などに住んだのち香取地区に移住した一世で、話者④～⑥が香取で生まれ育った二世、話者⑦が香取で生まれ育った三世である。また、対照した音声として出雲方言話者2名の協力を得た。本来ならば鳥取西部の話者を比較するのが妥当なのだが、今回そのデータが得られなかった。しかしながら、中舌母音や変母音[e]を有する点で出雲方言と鳥取西部の方言が共通しているということで、今回は出雲の音声データを用いることにした。

調査内容は、質問形式で日本語5母音を2度ずつ発音してもらい、DATに収録、杉スピーチアナライザーを使用しサウンドスペクトログラムに示した。また、一部の話者に関して中井氏の作成したアクセント項目からいくつかの音声进行分析した。

### <話者の情報>

#### ・香取地区方言話者

話者①:1920(観音寺市粟井)―1940満州(兵役のため)―1946(香取)―現在まで

話者②:1930(綾歌郡飯山町東坂元)―1946?(香取)―現在まで

話者③:1942(三豊郡詫間町)―1949頃(九州など)―1953(香取)―現在まで

話者④:1950(香取)(但し外住鳥取県関金1年)―現在まで

話者⑤:1953(香取)(外住神戸3年)―現在まで

話者⑥:1965(香取)―現在まで(外住不明、5年以下:現在香取から米子?へ通勤)

話者⑦:1986(香取)―現在まで(高校入学後現在米子で?寮生活)

#### ・出雲方言話者

話者1:1925(出雲市)―現在まで

話者2:?\*老年層であることは確か(出雲市)―現在まで



### 8.3 調査結果と考察

#### 8.3.1 変母音/e/の有無

変母音/e/は、日本語の歴史の中でヤ行音の[je]に当たる部分であり、今日の山陰地方などに残存した音声といわれる(今石,2004)。母音の音響的研究はP. ラディフォギット(1997)で詳しい。その中で、第1フォルマント(F1)は舌が口蓋にどの程度接近しているかということに影響し、接近するほどフォルマントは低くなる。また、第2フォルマント(F2)は円唇性に関係し、円唇になるほど声道の長さが長くなるのでそれに従い第2フォルマントが低くなると述べている。表1は、『概説日本語学』(2000)よりNHK男性アナウンサー10名の「い」と「え」のフォルマントの平均を出したものである。/i/と/e/を比較したとき、共通語の場合は第2フォルマントが/e/で低くなっていることから、円唇度が増したことが示唆される。これが変母音の/e/の場合であると、第2フォルマントが高くなる。

表1. 共通語の/i/と/e/のフォルマント (男性)

	/i/	/e/
F2	2300	2039
F1	308	467

表2,3は本調査の出雲方言話者の音声に変母音の特徴として香取地区の話者と比較するに妥当な資料となるものかどうか確認するために、前川氏、今石氏の調査した変母音と比較したものである。今石氏の調査した話者は女性なので男性よりも周波数が高くなることを考慮しなければならない。その上で表2と表3のフォルマントを比較すると、まず第1フォルマントの/i/と/e/は同じぐらいか、/e/で高くなっている。これは表1の場合とあまり変わらない。一方、第2フォルマントをみると、/e/のフォルマントが/i/よりも高くなっていることがわかる。これは表1のときと逆の現象が起こっている。つまり、/e/が非円唇化されているということで、これが変母音/e/の特徴の一つと考えられる。

\*1 『概説日本語学』第2章音声・音韻を参照にした。なお、この資料は今石元久「10 音声の分析・合成」(金田一春彦編『日本語百科大事典 (V 音韻・音声)』大修館書店 昭和63年)による。

表 2. 胃/i/のフォルマント(Hz)

	前川氏の調査・ 出雲～鳥取西部話者 の平均<老～荘・男>	今石氏の調査・1980 鳥取日吉津村の話 者<老・女>	本 調 査 ・ 出雲方言話 者<老・男>
F2	2129	2400	2088
F1	362	400	430

表 3. 絵/e/のフォルマント(Hz)

	前川氏の調査・ 出雲～鳥取西部話者 の平均<老～荘・男>	今石氏の調査・1980 鳥取日吉津村の話 者<老・女>	本 調 査 ・ 出雲方言話 者<老・男>
F2	2364	2500	2347
F1	369	650	495

次に、本調査の主役である香取話者の音声を上記で確認した出雲方言話者の音声と比較してみる。表 4,5 は香取話者の日本語母音「胃」(i/)と「絵」(e/)を、フォルマントとサウンドスペクトログラムで示したものである。表 4 と表 5 の第 1 フォルマントをみると、それぞれ/i/よりも/e/の方が高くなっている。第 2 フォルマントに注目すると、話者⑥を除いて、/i/の第 2 フォルマントは/e/よりも高くなっている。出雲方言話者でみられた/e/の第2フォルマントが高くなる現象は香取話者ではみられなかった。聴覚的にもすべての話者において変母音/e/はみられず、一世では変母音の影響が多少なりともあるかと思ったが全くなかった。

表 4. 胃/i/のフォルマント (すべて男性の音声)

(③と④はフォルマントが抽出できず分析不可能)

	話者①	話者②	話者⑤	話者⑥	話者⑦		出雲話者1
F3	3746	4069	4134	3208	3466	F3	3897
F2	2562	2519	2691	2433	2476	F2	2088
F1	150	236	301	258	366	F1	430

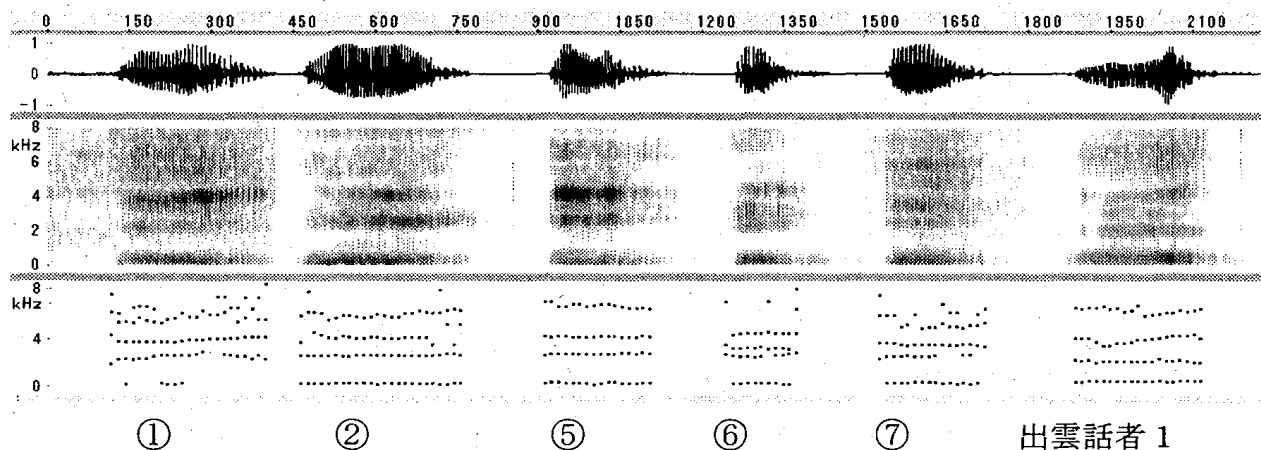


図1. [i] (胃) のサウンドスペクトログラム (すべて男性の音声)

表 5. 絵のフォルマント (すべて男性の音声)

(③と④はフォルマントが抽出できず分析不可能)

	話者①	話者②	話者⑤	話者⑥	話者⑦		出雲話者1
F3	3789	3466	3875	3423	3466	F3	4134
F2	2260	2390	2390	2476	2217	F2	2347
F1	452	452	473	366	473	F1	495

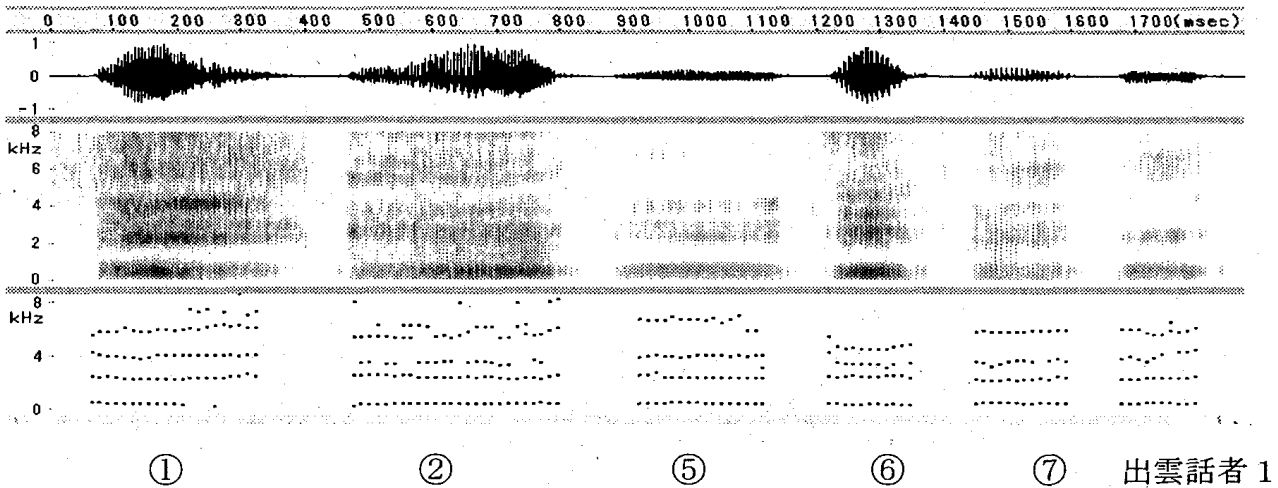


図2. [e] (絵) のサウンドスペクトログラム (すべて男性の音声)

### 8.3.2 香取話者の中舌母音

香取話者が鳥取西部の方言の影響を全く受けていないかということそうでもない。話者③は相手が香取の人か鳥取の人かでコードスイッチを行うという。話者③は 1942 年に詫間で生まれ、1949 年頃から九州などに移住、その後 1953 年に香取地区に入植した。約 50 年間香取で生活していたことになる。もちろん佐摩や米子への行き来もありその中で触れた鳥取西部のことばにも詳しい。音声調査の中でこそその影響はみられなかったが、アクセント項目の読み上げ後、これらを鳥取弁で発音するとどのようになるか試しにいくつか読んでもらったところ、香取話者の中舌母音を聞くことができた。

たとえばキの発音は[k ɕ i]、チとツやシとス、いわゆる/Ci/と/Cu/が混同すること、またりの発音が[ri]となることなど、実際に発音していただくことで確認できた。これは里部に出たときに鳥取のことばを使う人にあわせて使用するようで、よってこれらの発音もそこで身につけたものであろう。

香取話者のフォルマントを見る前に、まず共通語/i/と/u/のフォルマントをみておくことにする。表6より、/i/と/u/の第2フォルマントを比較すると、/i/が/u/より1000Hz以上も高くなっていることがわかる。

表6. 共通語の/i/と/u/のフォルマント (男性)<sup>\*1</sup>

	/i/	/u/
F2	2300	1119
F1	308	333

次の表7は、話者③の発音について香取で使う場合と里部で使う場合の/i/のフォルマントをそれぞれ測定したものである（参考までに各々のサウンドスペクトログラムを最後に載せてある）。いずれの単語においても香取音声よりも鳥取音声の方で第2フォルマントが低くなっている。これは非円唇→円唇に変化する途中であり、かつ声道も長くなっていることが示唆される。話者③のこれらの音声は[Ci]から意識して中舌化された音声であると考えられる。

表7. 話者③の発音した/i/のフォルマント(Hz)

		話者③の香取音声	話者③の鳥取音声
秋「あき」	F2	2390	2045
	F1	301	322
金「きん」	F2	2734	1528
	F1	344	236
口「くち」	F2	2131	1184
	F1	258	301
石「いし」	F2	2627	1227
	F1	301	—
針「はり」	F2	2325	1464
	F1	279	—

さらに、香取話者③の音声と出雲方言話者音声とを比較してみる。表8は「口」の/i/のフォルマントを測定したものである（参考までに各々のサウンドスペクトログラムを最後に載せてある）。これをみると、話者③の鳥取音声と出雲方言話者の口の/i/のフォルマントでは、第2フォルマントが低くなっている点で同じである。話者③の第2フォルマントは1184Hz、出雲男性1の第2フォルマントは1593Hz、出雲男性2のフォルマントは1658Hzとなっている。話者③は香取の人と話すときには[i]（第2フォルマント2131Hz）として発音し

\*1 『概説日本語学』第2章音声・音韻を参照にした。なお、この資料は今石元久「10 音声の分析・合成」（金田一春彦編『日本語百科大事典（V音韻・音声）』大修館書店 昭和63年）による。

ているので、母音に関しては明らかに出雲方言の中舌母音を使っていることがわかる。ただ、第2フォルマントが低くなっているとはいえ、香取話者の中舌母音/i/は共通語の/u/のフォルマントとよく似ていることに注目しなければならないだろう。出雲方言話者の第2フォルマントは共通語の/u/ほど低くなっていない。これは香取話者による中舌母音の「過剰修正」が生じたものなのだろうか。

表8. 口「くち」の/i/のフォルマント

	話者③の香取音声	話者③の鳥取音声	出雲話者(老年層1)	出雲話者(老年層2)
F2	2131	1184	1593	1658
F1	258	301	495	473

#### 8.4 まとめ

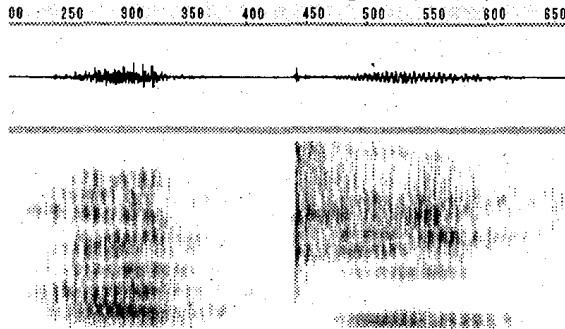
本調査では、変母音/e/及び中舌母音/Ci/と/Cu/の音声を中心に鳥取の音声がどの程度香取の人たちに影響を与えたのかということについて調べた。

結果、全体的に世代差に関係なく鳥取の影響を受けたものはみられなかった。話者①～③が香取に移住したころ、つまり 1940～50年代の鳥取西部は、中舌母音や変母音/e/のあったというが、香取で使われることはなかった。これには入植した場所が大山という、地理的に鳥取の人と接することの少ない環境の中で生活していたことがその一因として考えられる。

ただ、話者③は鳥取の人と話すときは鳥取のことばに合わせる場合もあるようで、いくつかの音声を得ることができた。中でも、中舌母音について出雲方言話者の音声と比べると、第2フォルマントが出雲方言話者よりもかなり低く、過剰な中舌化を行ったようにうかがえた。音声は語彙や文法、アクセントよりも習得するのが困難であると思われるが、移住による音声変容という視点から考えると興味深いデータが得られたと思われる。

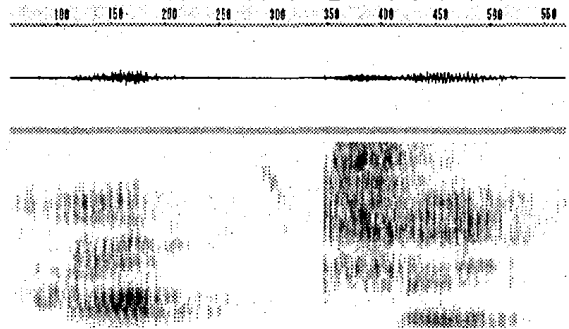
<参考資料>サウンドスペクトログラム

図3. 秋(香取話者③の香取音声)



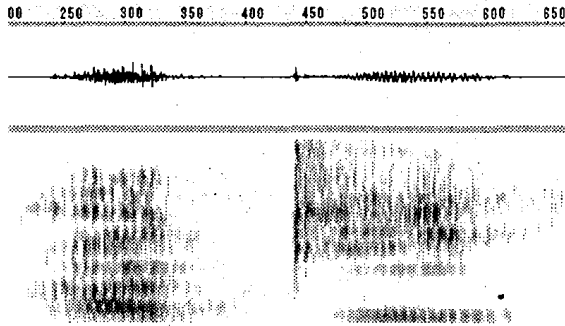
/ a k i /

図4. 秋(香取話者③の鳥取音声)



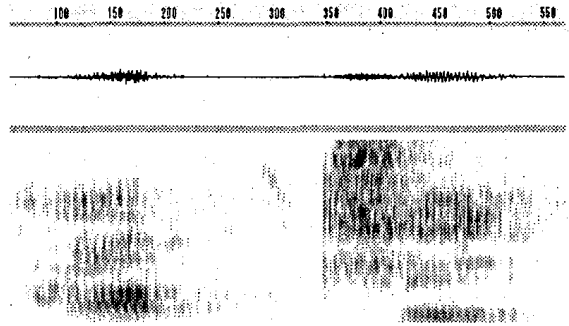
/ a k i /

図5. 金(香取話者③の香取音声)



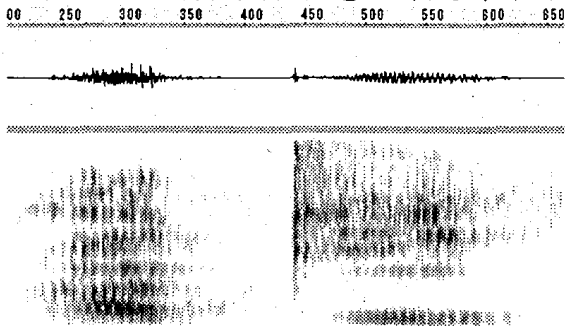
/ k i n /

図6. 金(香取話者③の鳥取音声)



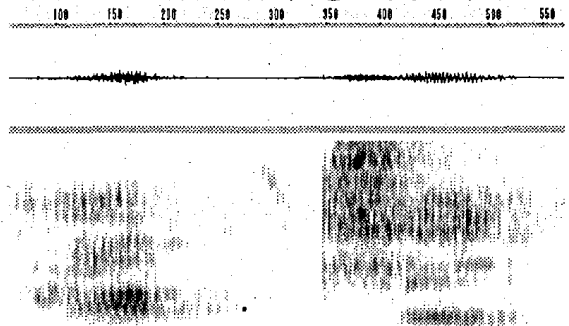
/ k i n /

図7. 口(香取話者③の香取音声)



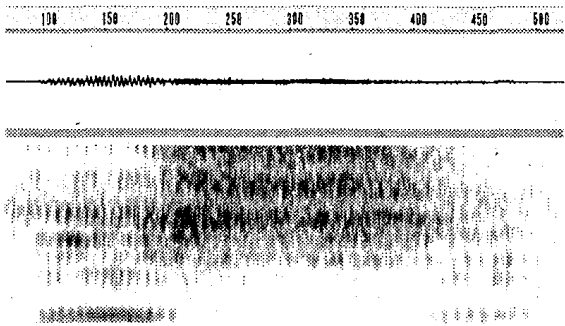
/k u t i /

図8. 口(香取話者③の鳥取音声)



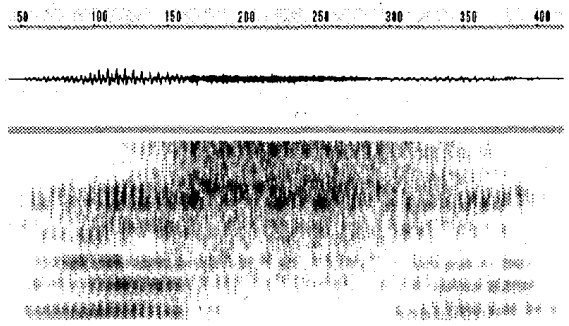
/k u t i /

図9. 石(香取話者③の香取音声)



/ i s i /

図10. 石(香取話者③の鳥取音声)



/ i s i /

図11. 針(香取話者③の香取音声)

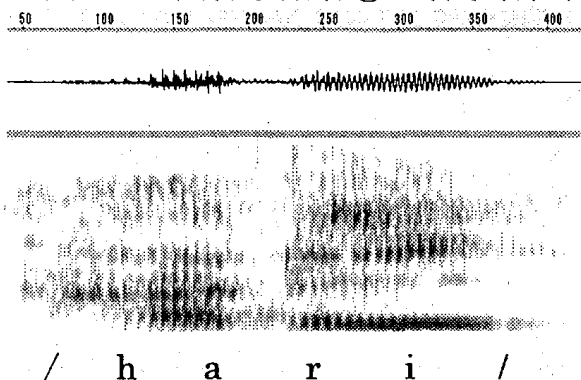


図12. 針(香取話者③の鳥取音声)

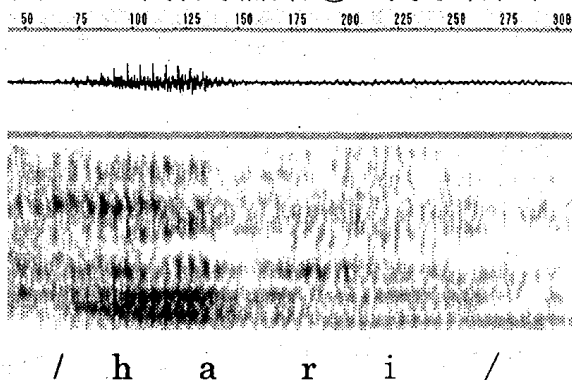


図13. 口(香取話者③の香取音声)

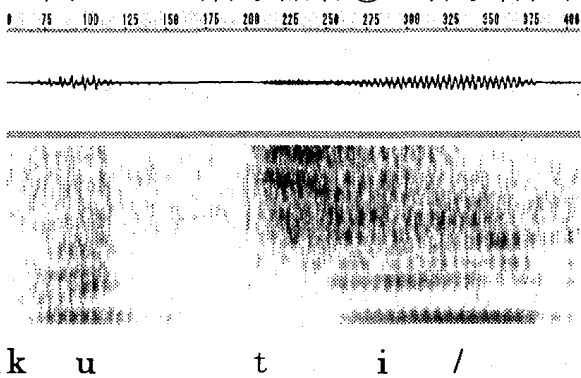


図14. 口(香取話者③の鳥取音声)

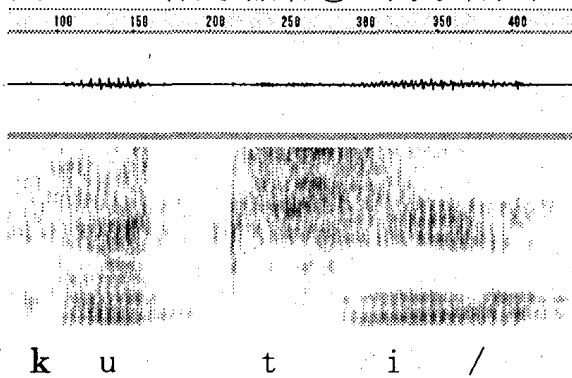


図15. 口(出雲話者1の音声)

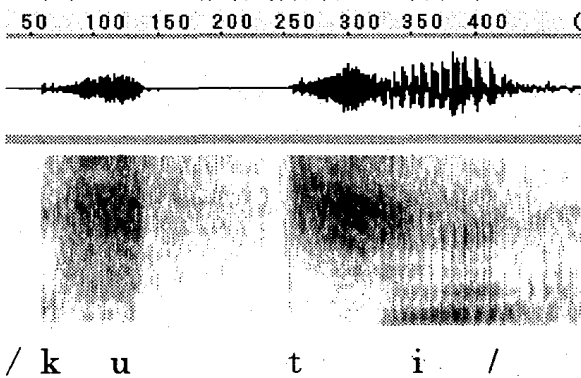
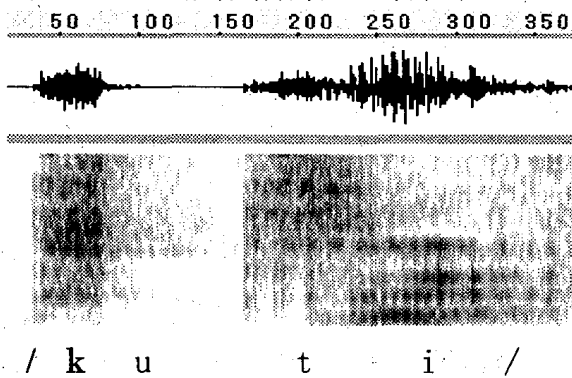


図16. 口(出雲話者2の音声)



## 参 考 文 献

- 今石元久 2004 『鳥取の伝統方言』 日本文教出版
- 今石元久編修 2005 『音声研究入門』 和泉書院
- 上野善道 1982 「鳥取県における中輪・外輪両アクセントの境界地帯調査報告」  
『言語学演習'82』 東京大学文学部言語学研究室
- 小野米一 2001 『移住と言語変容』 溪水社
- 香川県はなしことば研究会編 2002 『讃岐弁あれこれ』 同研究会
- 香取開拓農業協同組合 1994 『香取村開拓四十五年誌』 香取開拓農業協同組合  
刊
- 佐藤栄作 1986 「香川県高瀬アクセントについて」『山手国文論攷』 7
- 佐藤栄作 1986 「香川県高瀬アクセント所属語彙 用言篇(1)」『神戸山手女子短期大学紀要』 29
- 佐藤栄作 1987 「アクセントの『下降調』をめぐって—併せて香川県高瀬アクセントの用言の音調の報告—」『第44回日本方言研究会発表原稿集』
- 佐藤栄作 2005 「三野町方言の特徴」『三野町文化史2 三野町の民俗』 三野町
- 玉井節子 1965 「香川県のアクセント」『国語研究』 20
- 中井幸比古編著 2002 『京阪系アクセント辞典』 勉誠出版
- 西村 拓 1990 「移住と言語変容 十津川村からの移住者を対象として」『地域言語』 2
- 平山輝男 1978 「移住者二世の言語—特に無アクセント地域の場合—」『国語学』 114
- 広戸惇・大原孝道 1952 『山陰地方のアクセント』 報光社
- 広戸 惇 1965 『中国地方五県言語地図』 風間書房
- 室山敏昭編 1998 『日本のことばシリーズ 鳥取県』 明治書院
- 国立国語研究所 1999 『方言文法全国地図4』 大蔵省印刷局
- 工藤真由美 1998 「西日本諸方言と一般アスペクト論」『言語』 27-7
- 工藤真由美 2000 「アスペクト表現の地域差」『国文学 解釈と鑑賞』 65-1
- 工藤真由美代表・木部暢子編集 (2000) 『方言のアスペクト・テンス・ムード体系変化の総合的研究』 科研成果報告書
- 工藤真由美 2001 『方言のアスペクト・テンス・ムード体系変化の総合的研究』  
科研成果報告書
- 脇田順一 1975 『讃岐方言の研究』 国書刊行会
- 今石元久 1980 「中舌母音の formant の検討—鳥取県西伯郡日吉津村方言を対



象にして一」

今石元久1980「鳥取県西部地方方言の音声学的研究—鳥取県西伯郡日吉津村方言の中舌母音(Ci)(Cw)などについて—」『鳥取大学教育学部研究報告人文・社会科学』鳥取大学教育学部

鈴木一彦, 林 臣樹, 飯田晴巳, 中山緑朗(2000)『概説日本語学』明治書院  
前川喜久雄, 井上美穂, 青木直子, 井口厚夫, 久保田時子, 石川吉紀, 小島慶一, 菅原 勉1983「出雲地方の母音」 『SOPHIA LINGUISTICA 11号』